
愛したい10のお題 改め 6人の物語

sanana

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛したい10のお題 改め 6人の物語

【Nコード】

N5068Q

【作者名】

s a n a n a

【あらすじ】

お題をお借りして、断片的な小話を。

メインの登場人物は6人。

そのうち5人は大学時代の同級生です。

医者とか監察医とか警察とか言ってますが、

そちらの知識は全くないままですので、その辺はフィクションです。
。。

「愛したい10のお題」が終了しましたので、章だてにすると同

時に、

タイトル付けました。

6人の物語

そのまんまだな！。

お題は【Abandon】様よりお借りしております。

http://haruka.saiin.net/
title
/0/

対象になるのはあの人。（前書き）

大学時代の蕎子さんの気づきの話。

お題は【Abandon】様よりお借りしております。
愛したい10のお題

[http://haruka.saiin.net/
title/0/](http://haruka.saiin.net/title/0/)

対象になるのはあの人。

- 対象になるのはあの人。

「蕎子さん、俺と付き合わない？」

「せっかくですが、パス」

「うそ、どうして？」

「そこで、うそ、って聞くとところが私には向いていないからです。」

「なんだよ、それ。」

「ごめんなさいね、どう考えても服部君のことは同級生としか見られません。」

「きついよ、それ。」

「きつくても、なんでも。うそつけないから。わかってるでしょう？」

今日の授業も終わり、私は部活に向かっている。

カフェの上の和室。

そこで、茶道部の練習が行われている。

本当はもう練習が始まっているので、早いところ行きたいのだから、できるものなら走りたい。

しかし、走れない。

そう、授業が終わった瞬間から、同じ教室で授業を受けていた服部君に、

なんと告白されているわけだ。

かなりの早足で歩いているというのに・・・。

よくこんな状態で告白するものだなあ、と、ちょっと感心している。急いでる、と言ったら、歩きながらでいいから、というので話を聞いたが、

まさかこんな状態で告白されるくらいなら、話を聞くことを断れば

よかった。

あまりにびっくりして、断り方もかなりひどいのではないか、と思いつつ、

もう止まらないのだ。

「・・・それが薺子さんだからなあ。」

服部君は同級生で、1年の頃から何かと話をする機会が多い。私にしては珍しく、気にせず話せる相手なので、とても貴重だ。女の子にももてる筈だが、付き合っている話は聞かなかった。それがよもやこんなことになるとは・・・。

「でも、好きになってくれてどうもありがとう。」

「そういうかわいいこと言っちゃうんだ。」

「まあ、ね。服部君は誤解しなそうだから。」

「なるほど。それ聞いてストーカーになったやつ、いるんだ。」

「いや、ストーカーにはなっていないんだけどね。」

ちよつと腕をつかまれたりして、斉藤さんと榊原さんに「ご足労いただいた方が。」

「ああ、柔道黒帯と空手5段だっけ？薺さんだって、確か合気道やってなかった？」

「まあ、ね。」

「ちよつと相手もかわいそうだなあ。」

「別にばこばこにしたりしてないわよ、人聞きの悪い！」

斉藤隆之と榊原海は、同じく同級生。

1年の初め、実験の授業が出席番号順でグループ分けされたときに一緒だったのがこの二人と佐久間真理絵ちゃん。

妙に気があって、それ以来何かとつるんでいるのだ。

「蕎子さん、好きなやついないの？」

「え？」

「付き合っちゃえば、告白ラッシュもなくなるんじゃないの？」

「それを服部君が言うかね。」

「俺だから言うんでしょ、告白ラッシュの当事者ですから。」

「なるほどね。・・・私が誰かと付き合ってたら、告白しなかった？」

「どうかなあ・・・。やっぱりしたかな、俺は。」

でも、他の学部は4年でもうすぐ卒業だから、皆揺れてるから、焦って告白するヤツ多いと思うよ。」

「でも医学部はあと2年間あるよ。」

「あなたに告白しているのは、医学部の人だけでしたっけ？」

「痛いところくねえ・・・。っていうか、何、何で知ってるのよ、そんなこと！」

「あのねえ、さっき俺はなんて言いましたか？」

好きなやつことは、よく見てるし気にしてるの当たり前でしょう？」

「す、すみません・・・。」

「で？今11月だろ？今年入って何人に告白された？」

「・・・服部さんで8人目でございます・・・。」

「2ヶ月に1回以上か。モテモテだなあ・・・。」

「どうして私なんかがいいんだろうなあ？」

「そりゃあ、あなたは美人だし、はつきりしてて話してると面白いから。」

「それで好きになってくれたんですか。」

「まあ、そんなところですね。・・・で、同級生でお友達ではいてくれるのか？」

「服部君がよければ、私は貴重なお友達は大切にしたいんですけど。」

「了解です。では今からお友達で。ほれ、握手。」

「ん・・・・・・・・。」

服部君は、とてもよい友達なので、本当に失うのは辛かった。ひどいことしているかもしれないけれど、友達でいてくれてとてもうれしい。

「薺子さんさあ、ほんとに恋愛対象いないのかよ。」

「ノーコメントです。」

「ノーコメントね・・・・・・・・。ま、いいけど。」

「なによ、それ。」

「ほんとに気づいていないの？」

「何が？」

「誰かいるんじゃないんですかね、対象の方が。」

「誰よ、それ。」

「だから気づいていないんですか、って聞いてんの。」

俺は少なくともそれに気づいたので、ちょっと焦って告白してみたんですけどね。

・・・・まあ、気づいていないんだったほんとにいいよ。俺の誤解かもしれないし。」

「私・・・・、何か変なことしてるってこと？」

「変なこと・・・・。面白いな、薺子さん、やっぱり。変なことじゃないけどね。」

いつも誰かさんのこと気にしているように見えるけど、気づいていないんだ。」

「いつも気にしてる？？誰のことを？？」

何を言っただ、いったい。

私が誰のことを気にしていると言っただろう？

「おしえな〜いっ」

「服部君っ！」

「だめ、今失恋したてなんだぞ、俺。甘えてもお友達でもそれだけはだめでっす。」

「ケチっ」

「ケチじゃありません。自分で考えなよ。」

ず、するいよう・・・。

本当にわからないのになぁ・・・。

ずるいって言っちゃいけないのだろうけど・・・。

「う~~~~~~~~ん・・・・・・。ほんとに自覚ないんだよね、私。」

「まあ、いいんじゃないの、それはそれで。」

「よくないでしょう、それは。」

「そのうち気づくよ。じゃ、おれ、もう行くわ。この後自棄酒が待ってるから。」

自棄酒って、ふってしまった本人に向かって言うかね、全く。しかも。

「ねえ、いつもいつもそうなんだけど、なんで私に告白した後の自棄酒の相手って、

隆之と海ちゃんなの？」

「そりゃあ、あの二人に一言断ってから告白してるからなあ。

その時に『まあ、もし自棄酒の相手がいなかったら付き合っよ』って、

うちの大学抱かれない男No.1と2に言われたら、

そりゃあ付き合ってもらっだろう。」

「なによそれ~~~~~~~~っ!!」

『うちの大学抱かれない男No.1とNo.2』ってのも初耳だけど、

なんで一言断ってるのよ、あの二人に！

「だってさ、お前たちいつも一緒にいるだろ？なんとなく暗黙の了解で、

『佐伯蕎子に告白するなら、あいつらに一言断ってから』ってなってるんだよ。」

「マネージャーなのか・・・、やつらは私の・・・。」

「まあ、あたらずとも遠からじ？って感じかな？

じゃ、またな。今度また飲もうぜ。」

「うん、またね。」

服部君はそう言っただけで去っていった。

「気にかけてる、か・・・。」

服部君のことが嫌いだったわけじゃない。だけど、どうしても恋人としては

見られなかったのだ。

佐伯蕎子22歳、はつきり言っただけで彼氏いない暦22年・・・。

もう、何とでも言っただけ・・・って感じだが・・・。

それでも恋はしているのだ。

ただ、自分が好きだと思った人に、ことごとく振られているだけで、そして告白してくれる人が自分の好きな人ではないだけで。

世の中すごいなあ。

あんなにみんなつきあっている人がいる。そんな奇跡的なことが起こりうるのだろうか？

自分の好きになった人が、自分のことを好きになってくれるなんて。

「だから蕎子にはいつまでも彼氏ができないのよ。」

「へ？」

茶道部のお稽古が終ったあと、自棄酒に付き合ってもらおうと呼び出した

真理ちゃんがそう言う。

ちなみにお稽古はかなりボロボロだったが、何とか終わることができた。

後輩がお菓子を1個余分に出してお茶点でてくれたくらいだから、相当ひどかったんだろう。

しかもいろいろと言いたかった海ちゃんも隆之も、お稽古に来なかった。

佐久間真理絵はさっぱりした性格で、とっても話していて気持ちがいい。

実験で同じグループになったのはもちろんだが、それだけで仲良くなるほど

女の子と言うのは簡単ではない。

特に私は、なんとなく隆之と海ちゃんとつるんでいるので、

彼らを好きな女の子からいろいろなことを言われたりもした。

（今にして思えば、抱かれない男を独り占めしていたのか、私は・・・）

最近はそのということもなくなり、他の女の子とも仲良く共存しているが。

とは言え、真理ちゃんや隆之、海ちゃんと一緒にいることが多いのは変わらない。

『あんたがバカみたいに誤解されやすいから、気の毒になったのよ。』と、

友達になってくれたあたり、かなり誤解されやすいのは真理ちゃんも同じだと思うが。

「だから、別に好きな人に告白されたから付き合っている人ばかりじゃないの。」

告白されて、『この人のこと好きになれそうだな』って思って付

き合う人もいるし、

『今誰とも付き合っていないし、嫌いじゃないし、いいか』って人もいる。」

「え~~~~~~~~??????」

「え、じゃないわよ、全く。あんたの周り、ほんとにどうなってるの?」

「どうなっている、と言われましても……。」

「女の子の友達とはそういう話しなかったの?」

「私の周りの女の子のお友達たちは、皆さん同じような感じでして……。」

「ああ、そうやって、誤解されている女ばかり集まっていたのね……。」

『かわいくて男にもてるくせに特定の彼氏はいないし、頭はいいし、性格もいいし、

ほんとに素敵よね、彼女たち。普通むかつくけど、むかつくことも出来ないわ』

「ってやつらだったんでしょ?」

「そんなことないよう……。」

「うそつけ。そんな素敵な女がいるものですか。ただのぼんやりバカが」

「そろってるだけなのに、まったく世の中の女どもは……。」

あの、あなたも女なんですけど……、しかもあなたも私の友達の一人なんですけど、

まあ、確かにあなたには立派でラブラブな彼氏がいますけどね、というせりふは、

怖いので飲み込む。

「真理ちゃんは?」

「え?」

「真理ちゃんは遠藤君と付き合ってるのはどうして？」

「そりゃあ、遠藤君はかっこいいし優しいし素敵だしかわいいし・・・」

か、かわいい・・・。

遠藤君、アメフトのディフェンスやってるくらい、ごっつい人だったと思うんだが・・・。

まあ、それはおいておいて。

「告白されたとき、遠藤君のこと好きじゃなかったの？」

「言いくいこと聞くのね、あんたって。」

私も遠藤君のことが好きだったのでお付き合いしましたわよ。

でも、世の中にはそういう女性陣もいる、ってこと。」

「なるほど・・・。」

真理ちゃんはお酒が強い。

入った和風居酒屋さんは、大変雰囲気もよく、日本酒も多くそろっている。

真理ちゃんは大好きな焼酎をロックで飲んでいるが、私は日本酒をちょこちょこ。

焼酎・・・、もう5杯目ですか？真理さん・・・。

全然酔ってませんよね・・・。

遠藤君つぶしたって、ほんとなのね・・・。

体育会系男子学生をつぶすほどの酒豪なあなた、すごすぎるわ。

「とにかく、そんなこと不思議に思っていないで、

自分のことちゃんと振り返りなさいよね。」

「へ？」

「蕎麦は好きな人いないの？」

「うん。いない、と思っていたんだけど・・・。」

「だけど？」

「今日、服部君に言われた。私、誰かのこといつも気にしてるって。」

」

「チツ、……服部のヤツ、余計なこと言いやがって……」

「え？真理ちゃんもそう思うの？誰？」

「ばーか、そんなの自分の胸に聞いて御覧なさい。」

「わかんないから聞いているのになあ。」

「それはね、自分で気づかないと意味がないんです。考えましょうね、ちゃんと。」

「はあい……。」

「ほら、今日は自棄酒なんでしょう？振っついて自棄酒って言うのも微妙だけど。」

「ま、振ってる方も辛いからね。ちゃんと飲んで飲んで。足りないんじゃないの？」

「あ、そういえば斉藤君と榊原君は？」

「隆之も海ちゃんも、服部君の自棄酒に付き合っているんじゃない？。」

「なんで？」

「何でかしらないけど、私に告白する前には、あの二人に一言断るのが」

「暗黙の了解なんだって。」

「なんだそれ？マネージャー？」

「知らないわよ、私だって。」

「そうなんだ、じゃあ、あんたもことん飲んどきな。送ってやるから。」

「真理ちゃん……。」

どぼどぼとお猪口に注がれ、とりあえず飲み干す。

私はほとんどの場合、どんなに飲んでも酔いつぶれることはない。ちよつと酔っ払いはじめると、自動的にセーブがかかって、飲み続けられないのだ。

そのためかなりお酒が強いと思われる。

しかし、斉藤隆之、榊原海、佐久間真理絵の3人のうち、誰かがい

ると、

私はたいていいつの間にか眠っているのだ。

恐ろしい確率で。

そして今日も例外ではなく・・・。

「まゝったく、かわいい顔して寝ちゃってるしなあ・・・」

薺子の顔を見ながら、真理絵がつぶやく。

「いい加減に気づかないと、さらわれちゃうぞ。」

ああ、でも、むこうもあんたのこと好きだから、さらわれないか。

「

お気に入りの焼酎、すでに10杯目。

「まゝったく、二人で鈍いんだからなあ・・・。」

起きてみると自分の家だった。

どうやって帰ってきたのか、もちろん覚えていない。

すっかり泊まっている真理ちゃんを起こして、ご飯を食べて学校へ。

「おはよ〜」

「あ、隆之、おはよう。」

「お前、元気だった？」

「何言ってるの、元気だったよ。」

・・・昨日どうやって家に帰ったのか記憶ないけど。

あれ？海ちゃんは？」

「・・・また真理絵と飲みに行ったのか・・・。」

海はまだ見てないな、そういえば。」

「そう。ね、隆之こそ昨日服部君と飲みに行ったの？海ちゃんと3人で？」

「昨日は服部と俺と二人。海はバイトだったみたいで欠席。」

「そっか〜。そういえば茶道部も来てなかった。」

隆之もサボったでしょう！」

「ああ、えーと、茶道部に向かう途中に早速服部に捕まったんだよ。」

「……で、えーと、服部君は……、げ、元気かな？」

「元気だろう、お前の後ろに立ってるぞ？」

後ろをすごい勢いで振り向くと、服部君がニコニコ立っていた。

「わ~~~~~~~~つ、びっくりさせないでよ。」

お、おはよう、服部君。」

「おはよう、薺子さん。太陽が黄色いよ。俺二日酔いかなあ。」

「そ、そうかも……。あは……。」

「あのさ、気にしてるならさ、今日の講義のノート、貸してよ。」

「へ？」

「今日の先生、出席とらないしさ、これ1回分でチャラ。どう？」

「服部君……。」

「まあ、チャラも何もないんだけどね、気にしてるみたいだから。」

俺眠いから部屋で寝てくるから、よろしくね。」

「うん、わかった。どうもありがとう。」

「どっちがありがとうなんだか。どういたしまして。」

服部君の後姿を見送る。

こっちを見ず、ひらひら手を振って教室から出て行く服部君。

どうして服部君ではダメだったんだろう。

そんなことを思いながら、その後姿を見送った。

服部君とすれ違いで、海ちゃんが教室に入ってきた。

散々悩んで買ったはずの、空色のピーコートが、すごくよく似合っている。

「おはよう、薺子。」

「おはよう、海ちゃん」

「お、おはよう、海。」

「ああ、隆之、あのさあ。」

隆之と話しながら、コートを脱ぐ。

そつえば、昨日は海ちゃんに会わなかった、と思う。

茶道部も休んでいたんだ、と思い出す。

そのとき、ふと気づいた。

いつも私が気になるのは。

いつも目で追ってしまうのは。

私が唯一恋愛対象と思っているのは。

何故今まで気づかなかったのだろう。

授業が始まり、服部君へ貸す約束もあるので一生懸命ノートをとりながら、

それでも頭の中はそのことばかりだ。

なぜ気づかなかったのだろう、今まで。

こんなにいつも一緒にいて、こんなにいつも見つめていた。

こんなにもあなたのことを気にしていたのに。

でも、もう気づいてしまったから。

もう気づかないふりはできそうにないから。

あなたが、好きみたいだ、ということ。

自覚するのはあと何秒？（前書き）

大学時代、蕎子さんと同じ時期に、
海くんもいろいろ考えています。

お題は【Abandon】様よりお借りしております。
愛したい10のお題

<http://haruka.saiin.net/title/0/>

自覚するのはあと何秒？

● 自覚するのはあと何秒？

「おーい、榊原、ちょっと話あるんだけど、平気？
あれ、斉藤は？」

それは、１１月のある昼下がりの穏やかな午後だった。
・・・とか言ってみると、なんとなくドラマチックだろうか。
単純に３限目が終わった後、声をかけられただけだ。

「隆之はこれとはつてないんだ。朝倉さんの講義の方だよ。」

「そっか、あつちか。ま、いいや、斉藤はこの後の講義が
一緒だったはずだし。」

声をかけてきたのは、同じ学科の服部だった。

ものすごくイヤツ、という感じで、かなりもてているらしい。
陸上部で長距離を走っているが、大会では沿道を
ファンの女の子が埋め尽くすとか埋め尽くさないとか。

「すぐ済むけど、次の講義は？」

「ああ、この後は何もないから大丈夫。服部こそ大丈夫？」

「大丈夫、大丈夫。」

服部は中庭のベンチに座り込んだ。授業の合間と言うこともあって
か、

他には誰もいない。

僕も服部の隣に座った。

「で、珍しいね、服部が僕に話なんて。」

「うん、まあね。えーっと、あのさ。」

俺、この後薔子さんに告白しようと思っているんだけど、いいか
な。」

服部よ・・・、お前もか・・・。

蕎子は大学入学当時、知り合った頃からもてていた。告白の場面はたくさん見たし、最近はずかしく僕と隆之に予告してからみんな告白していく。

今年に入ってから、えーと、服部で8人目、かな。

中にはストーカーじみたことをしたやつがいたので、隆之と僕とで懲らしめたこともあった。

ちなみに隆之は柔道を、僕は空手をやっている。

これでもそれなりに強い、つもりだ。

（蕎子も合気道をやっているのだが、本人が懲らしめてしまっただけ、は、

仕方がないので。）

ちなみに蕎子は今までその告白を受け入れたことはなく、隆之と僕はほぼ毎回自棄酒につきあっている。

「……そうか。頑張ってるよ。」

「おう、頑張るよ。まあ、蕎子さんモテモテだけど、誰とも付き合っていないからな。」

「ま、ふられたら自棄酒に付き合ってくれよ。」

「そんな、告白する前から弱気でどうするんだよ。」

「まあ、もし断られたら、自棄酒くらいつきあうけど。」

「あ、ごめん、今日はちょっとバイトの日だからムリだ。」

「だから、頑張れ、とりあえず。」

「そうだな、今日は珍しくバイトなんだ。うーん。」

「自棄酒には付き合えない、とすると、とりあえず応援だ。」

「ああ、とりあえず頑張るよ。ふられる気じゃ仕方ないものな。」

「……でもさあ……。」

「ん？」

「服部が言いよどむ。何だろう？」

「ほんとに告白してもいいの？」

「は？」

「な、なんで？」

「いやぁ・・・、まあ、いいんだけどさ。気づいてないなら、何にだよ。」

「何のこと？」

「いや、ほんとにいい、今の忘れて。」

き、気になる。。。

「すごい気になるんだけど、それ。。。」

「いや、まあ、気にしないでくれ、なかったことにしといてくれ。」

とりあえず俺は告白に全神経を集中することにするよ。」

そう言われてしまつては、応援している手前、

問い詰めることもできない・・・。

「・・・うん、頑張つて。でもまずは次、授業なんだろう？」

「あー、そうだ。そろそろ俺行くわ。じゃ、結果はまたな。」

「うん、じゃあまた明日。」

服部は教室へ向かつていった。一応、走つて。

僕は、立ち上がつてちょっと伸びをしてから、ゆっくり歩き出す。

本当は茶道部の日なのだが、バイトなので仕方ない。

僕のバイトは不定期も不定期、月に1回のときもあれば、

3日間連続のときもある。

時には週に2回ペースのこともある。

とは言え、バイト代は月額月7万円。破格のバイトだ。

気まぐれな雇い主に翻弄されているのだ。

いろんな献立を考えながら、僕は歩き出す。

・・・ふと頭を掠めた疑問を封じて。

ピンポン♪

「はあ”ゝい。。。」

「こんにちはー。」

「ああ、海、待ってたゝ。ごはゝん・・・。」

「いいけどさ、いつものことだけどさ、すごいねえ、なんか。」

俺のバイト先は姉の家。

姉は作家で、不定期に缶詰になる。

その間、自分にかまうことなく、化粧はもちろんしていないし、風呂にもあまり入らず、服装もぼろぼろで、

気が付いたら全く人前に出られる状態ではなくなる。

とはいえ、いつも思うのだが、本人が思っているほどひどくはない。

しかし、本人のプライドがそれを許さず、出前すら取ることができず、買い物にも行けず、飢え死に寸前となる。

その際に買い物をしてしばらく分の食事を作る。

外に出る用事が他にあればそれをこなす。

それが僕のバイトだ。

楽と言えば楽だが、基本的に日程の選択権がない。

とは言え、多少の時間は融通が利く。

身内へのお互いの甘えと妥協の上に成り立つバイトではある。

「何食べたいの？」

「うどん、おでん。あと、ほうれん草の胡麻和えが食べたい。」

「はいはい、んじゃ、準備しましょ。っていうか、買い物行ってくるよ。」

「はい、軍資金。」

「んじゃ、いつてきます。」

買い物用のいつもの財布を受け取ると、僕は近くのスーパーへ向かった。

おでんの具とほうれん草の胡麻和え、そして作り置きしておこうと思っている

スーパの具を買う。後でパンも忘れずに買わなくては。

ちよつといいスーパーに来たので、ちよつといい昆布を買おうと

見ていた時、ふとさっきの服部を思い出した。

そして、気が付いたらつぶやいていた。

「本当にいいのかって、なんなんだ。」

まるで僕が蕎子のことを好きみたいじゃないか。」

「……………つぶやいて驚いた。」

「……………」

あれ？

あれあれ？

なんだ、この感情は。

どうしたんだ？

「……………さすがにこの展開は、ギャグみたいだぞ。」

ちよつと、ゆっくり考えよう、おでんでも作りながら。

「……………」

動揺した僕は、気合をいれて、必要な量の倍の材料を買いそろえて
帰り、

姉に大目玉を食らった。

「あ、斉藤、いいところに。講義前にちよつと話がある。」

「おう、服部、なんだ？珍しいな、俺に用なんて。」

もしかして、お前、蕎子に告白するの？」

「なんだよ、バレバレかよ。まあ、この授業の後にな。」

ふられたら自棄酒付き合えよ。榊原はバイトでダメだって言うし。

「

「まあ、もちろん付き合っけどさ。告白する前からそれはないんじゃない？

頑張れよ。」

「さつき榊原にも同じようなこと言われた。まあ、頑張るんだけどさ。」

「……………で、俺が心配することでは決していないんだけどさ、

榊原って、どうなの？」

「どう、とは？」

「好きなんだろう？蕎子さんのこと。本人、気づいていないのか？」

「……………お前、よく気づいたな。」

「そりゃあ、蕎子さんのことはよく見てるからな。

蕎子さんも、だろう？」

「お前、それでも告白するんだ。」

「まあ、自覚がない前にとりあえず言うだけ言いたいなあ、と思つて。」

自己満足で悪いんだけどね。」

「ま、服部は変なやつじゃないからな、信用しとくよ。

でも、蕎子泣かしたら、タダじゃおかねえからな、覚えとけよ。」

「うわ、怖いな、覚えときますよ。」

「よろしく。」

「……まあ、でも、あの二人も、時間の問題だとは思うんだけどね。」

「自覚するのはあと何秒？つて感じか？」

「そうだねえ。じきだね。」

変な言い方だけど、お前の告白は、ある意味きつかけかもなあ。」

「まあ、来月はクリスマスもあるしなあ。

いいんだ、例えばきつかけだったとしてもさ。」

俺は蕎子さんに幸せになって欲しいし、榊原も嫌いじゃない。

結構あいつは気に入ってるしな。」

「俺も変なヤツに蕎子をやりたくはないけど、服部はいいヤツだと思ってるよ。」

もちろん、決めるのは蕎子だけだな。」

「ま、気を使わなくてもいいって。榊原応援してやれよ。」

そして俺のヤケ酒にはとことん付き合えよ。」

「……、こういう日は海のバイトが少し恨めしいな。」

「そういうなって、よし、まずは講義だ！頑張ってノート取れよ、
斉藤。」

俺は多分手につかないから、後で貸せよ。」

「……、まあ、いいけどね。。。」

ぼんやりとスープに入れるジャガイモをむきながら、
考えてしまうのは服部と蕎子のこと。

今頃もう告白したんだろうか。

蕎子はなんて答えたんだろうか。

・・・・・・僕は明日、どんな顔で大学に行くんだろうか。

そして材料を2倍買ってきた時点でかなり怒られていたのに、
出来上がった寸胴鍋一杯のスープと、

大鍋一杯のおでんを見て、姉は怒らずため息をつくと、
実家に晩御飯を作るな、という電話して、

ときはきと半分を僕が持ち帰るように荷造りし始めた。

最早怒る気もうせているらしい。

そうは思っても、なんとなく気持ちが悪く動きについてこない。

・・・・・・僕のぼんやりは、まだまだ続きそうだ。。。

友愛と恋愛感情の違いについて（前書き）

大学4年のクリスマスシーズン、隆之編

お題は【Abandon】様よりお借りしております。
愛したい10のお題

[http://haruka.saiin.net/
title/0/](http://haruka.saiin.net/title/0/)

友愛と恋愛感情の違いについて

● 友愛と恋愛感情の違いについて

「全く、お前たち二人していったい何考えていやがるんだっ。」

「二人、って、誰のこと？」

「お前と蕎子しかないだろう、二人って言ったらっ。」

「え？蕎子？なんで蕎子が？」

「お前の前にな、蕎子さんがうちに来たんだよ。」

それで、お前と同じようなことを言いやがるんだ。

全く、お前たち二人して、俺を何だと思ってるんだよ。」

「何だと思ってるって、何だよ。蕎子がどうしたんだよ？」

つい1時間ほど前のことだ。

蕎子がうちにやってきた。

クリスマスを1週間後に控え、街は赤と緑でうかれきっている。

「お、蕎子。」

「ごめんね、隆之。ご飯食べた？ちよつと話があつて。」

「おう、飯は大丈夫。珍しいなあ、急に来るなんて。バイトは？」

「今日はお休みです。お邪魔します。あ、コーヒーがいい。」

「お前、聞く前に言うかよ。はいはい、コーヒーね。」

「うん、隆之コーヒー入れるの上手だね。おいしいんだもん。」

「ほめてもコーヒー以外出ないぞ。何もおやつがない。」

「大丈夫。別におやつ食べに来たわけじゃないんだから。」

勝手知ったる人の家、とばかりに、勝手に気に入っている俺の椅子に座る。

ぱらぱらと俺が図書室から借りた本を見ている。

こいつが「話がある」なんて来るのは、珍しい。

ふらっと来るのはいつものことだが、何なんだ？

「はい、コーヒー。で、話って何だ？」

「ありがとう。あゝ、やっぱりおいしいな、コーヒー。」

「言いにくいことなのか？」

「ええと……。あのね、あの〜。」

「なんだよ、気持ち悪いなあ。」

「うん、うだうだ言っても仕方ない。うん。」

あのね、来週のクリスマスイブですが、

私、海ちゃんをデートに誘おうと思ってます。」

「はあ。ようやく？」

「何よ、その『ようやく』ってのはっ！人が一大決心でっ！」

「あゝ、わかった、わかった、悪かったよ。」

で、イブに俺に一人で飯を食わせて悪いな、って

言いに来てくれたのか？」

大学に入って4年、クリスマスイブは海と蕎子と俺の3人で必ずパーティーをしていた。

「それもある、それもあるの。それも悪いと思ってるんだけど。」

「それだけじゃないわけ？」

「うん。はつきり言うわ。」

隆之ね、海ちゃんに告白するなら今のうちだからね。」

「は？」

「デートに誘って、ちゃんとその日に告白するつもりだから。」

隆之も告白するなら今のうちだからね。」

「はあ？」

「だって……。隆之も好きでしょう？海ちゃんのこと。」

「お……。お前……。」。

二の句が次げないとはこのことか？

「お前、なあ。それを言いに来たわけ？」

「そうよ。だって、こういうのはフェアにいかなくっちゃ。」

「フェアですか……。」

力が抜ける……。

「ど、どうしたの？隆之、疲れてるの？」

「いや、お前の話を聞いて疲れたの。話し終わった？」

「うん、それだけだけど。」

「じゃあさ、とりあえず今日のところはこの辺で勘弁して。」

「何よそれ。」

「はいはい、わかりましたから。」

告白することは絶対じゃないけど、一応ちゃん考えるから。

それととりあえずイブは一人でちゃんと飯食つとくから。

大丈夫だから。」

「ほんとにほんとね？」

「はい、姫に誓ってほんとです。」

だからお願いだからもう帰ってくれるか？」

「なんかちよつと納得いかないけど、とりあえずじゃあ帰るわ。」

隆之。」

「何ですか？姫君？」

「私が告白したときに約束したよね。一生友達でいてくれるって。」

今も有効だよな？」

「うん、一生有効だから心配するな。お前とは一生仲のいい友達だ。」

」

2年前、薺子に告白された。

しかし、俺には薺子のことをどうしても恋人として好きになれる人だと

思えなかった。

俺が今まで好きになった人は、全員男だった。

だからといって俺が男しか好きにならない、というわけでもないだろう

と思った。

だから、時間をもらってよく考えた。

薺子は頭もいいし、話をしていてもとても楽しい。

派手な見かけを全く裏切った気のいいやつで、かなりいい女だと思っている。

だけど、恋することができなかった。

大学に入ってから、出席番号順で並んだことがきっかけで、

海と蕎子と俺は、いつもつるんでいた。

なぜか気があつたのだろう。

そして、蕎子に告白されたことは海に話したし、蕎子も海に話したそう。

その海に告白しないでいいのか、と、蕎子が言う。

「だからね、今度のクリスマスに、蕎子を誘うと思ってるんだ。」

「はいはい、ようやくお前もか。」

「お前もかつてなんだよ?」

「いや、こつちの話。で、イブに俺に一人で飯を食わせて悪いな、って

言いに来てくれたのか?」

「それもある。悪いな、って思ってる。でもそうじゃなくてさ。」

「なんだよ。」

すごく、嫌な予感がした。

「お前さ、蕎子のこと、好きなんじゃないのか?断ったこと気にしてないか?

告白するなら今のうちだぞ。」

絶句するのはこのことだ。

「全く、お前たち二人していったい何考えていやがるんだっ。」

「もうわかったから、お願いだから、海も帰ってくれよ。」

マジで泣きそうだよ、俺。」

「なんで泣きそうなんだよ?でも、まあ、ほんとにさ、ちゃんと考えてよ。」

「はいはいはいはいはい、わかりましたから、じゃあ、お休みな。」

「お、おい、隆之つ。」

ガチャツ カチャリ

無理やりドアから出して、鍵をかける。

「なんだかなあ、全く・・・」

海のこと大切になっている。

あいつは俺の好きになったやつがごとく男でも、何も言わない話も普通に聞くし、全く偏見のない目で俺を見る。

冷静でクールで繊細に思われているが、あれでかなり熱いところもある。

本当にいい男だ。

しかし、海もまた、恋する相手とはどうやら違うようなのだ。

友愛と恋愛感情の違いについて、俺はよく考える。

特に俺の恋愛対象が同性であることが多いため、それは必要不可欠だ。

よく、抱けるか抱けないか、という話が出てくるが、それとも違う気がする。

海と蕎子には、同じ思いを持っている。

それは二人とも、大切でかけがえのない人であるということ。

やつらを独占したいわけではないのだ。

ふたりがうまくいくなら、それは本当にうれしいことだ。

たとえ3人で過ごす時間が減ろうとも、一向に構わない。

あの二人はずっとお互いが好きだったはずなのに、

自分の気持ちに向き合おうとしなかった。

だから告白しようとしているのは、とても喜ばしいことなのだ。

そして、多分、俺の恋愛感情は、大切でかけがえがないだけではすまないのだと思う。

多分もつとどろどろとした、醜い独占欲や全てを奪いたい気持ちが
出てくるだろう。

そして全てを奪いつくして欲しい気持ちも。

「俺って、意外と余裕のない男なんだなあ。」

自分のためにコーヒーを淹れなおして、ふとつぶやく。

きっと醜い自分も全て受け止めてくれる人が相手だったら、
俺にはまた新しい気持ちが生まれるのだろう。

そう、信じる。

いつか、俺が愛すべき人に出会えることを切に祈る。

そして、もちろんうまくいくだろうあの二人に、

素晴らしいクリスマスイブが訪れるように。

W i s h Y o u r M e r r y C h r i s t m a s !

とはいえ、一人で過ごすクリスマスイブ。

外に出なくてもいいように、備えは完璧にしないとな。

さて、何を食おうか・・・。

試してみようか（前書き）

大学卒業後、海は外科医、蕎子は監察医、隆之は刑事になってます。これは蕎子に振り回される海の話。

外科医も監察医も刑事も、全く詳しくありません。

あり得ない違いなどございましたら、

もういつそあなたのよくご存じの世界と似た世界の話だと思っていただければ幸い。

お題は【Abandon】様よりお借りしております。

愛したい10のお題

<http://haruka.saijin.net/title/0/>

試してみようか

- 試してみようか

「試してみようか」

と、蕎子が言う。

僕には逆らえない。

「いいよ」

と答える。

「じゃあ、1週間後にね」

1週間、会わない、電話もしない。

会えるような場所に行かない。

蕎子がどうしてそんなことを思いついたのかわからない。
今日は日曜日。

蕎子と会うのは3日ぶりだ。

「海ちゃん。あのね。」

「うん？」

蕎子の大好きなカフェで、お茶を飲んでいるときだ。

蕎子は珍しくコーヒー、僕はミルクティを飲んでいる。

席数10席という、小さな、しかし居心地のよい空間は、
行ったこともないフィンランドの香りがする。

その日も特別変わったことがあったわけではない。

お昼に蕎子が僕のマンションへ来て、昼食を食べ、

その後散歩がてらこのカフェへやってきた。

「人はね、会えなくなったらその人のこと忘れちゃうのかな？」

「そんなことないんじゃない？」

「そうかな。」

「そう思うけど。どうしたの？」

「じゃあ、海ちゃんは1週間私に会えなくても、私のこと忘れない？」

「どうしたの？なんかおかしい。」

「ねえ、忘れない？」

「忘れないよ。」

「試してみようか」

「試してみるって？」

「1週間、会わないの。」

「1週間会わないの？」

「そう、会わない、会いそうなところにもいないし電話もしない。」

「どうしてそこまでやりたいの？」

「どうしても。」

「・・・理由を言う気はないんだね。」

ため息をつきながら僕は言う。

薺子はいろんなことを考えている。

いろんなことを考えて、いろんなことを話したり、

いろんなことをしたりする。

それは、他の人から見ると、まるで意味がわからないが、

薺子にとっては大変大切なことのようなのだ。

隆之と僕は割りときらめて慣れている部分もあるが、

他の人はそうはいかないだろうに、それにまつわるトラブルは聞かない。

人徳なのか、僕と隆之にしか見せないところなのか。

それを喜ぶべきかもわからないが・・・。

「いいよ」

「いいの？」

「イヤだつて言っても、きかないんでしょう？」

「・・・よくお分かりで。」

「付き合っても長くなってきましたからねえ・・・。」

「なるほど。」

「1週間でいいの?」

「うん、1週間でいいの。」

「ふうん。」

「変かな?」

「まあね、でもやるんでしょう?」

「うん。」

「コーヒーを飲み干して、蕎子が立ち上がる。

「じゃあ、1週間後にね。」

「まだ飲み終わってないんですけど」

「ごゆっくりどうぞ。でも私は帰る。」

「もう置いてきぼり?」

「そうよ。今が15時だから。1週間後の15時にここで。」

「来週の日曜日か……。いいよ。じゃあ15時に。」

「うん。あ、マスター、来週15時から、ここ予約してもいいですか?」

「いいですが……。予約ですか?」

「はい、ぜひ。」

「いいですよ、あけておきましょう。」

「ありがとうございます。じゃあ、海ちゃん。」

「ああ。」

につこり笑って蕎子は帰っていった。

客はたまたま僕しかいなくなり、すっかり顔見知りになったマスターが

カウンターから話しかける。

「蕎子さん、どうされたんですか?」

「さあ、僕にもいつものことながらわからないんですよ。」

「海さんにもお分かりにならないんですか。」

「ええ、なんなんでしょうねえ。」

「まあ、とりあえず差し入れます。」

あつあつのスコーンだ。大好物だったりする。

「うわあ、いいんですか？」

「はい、どうぞ。」

マスターがにつこり笑いながら渡してくれたスコーンを食べながら、僕は蕎子のことを考える。

・・・何か怒らせるようなことをしたかな？

月曜日、出勤途中にふと気づく。

僕は自宅から車で15分の病院に勤めている。医者というやつだ。僕の、いや、僕らの母校の付属ではないが関連している病院だ。

蕎子と隆之と僕は、大学の医学部で知り合った。

それなのに今や医者なのは僕だけだ。

隆之は刑事になった。

蕎子は、医者は医者でも監察医、死者専門なのだ。

僕は外科医なので、怪我をした刑事が運ばれてくることもあるし、僕らは仕事でも会うことがある。

そして僕の家から病院までの間に、蕎子の勤め先がある。道を変えないといけない。

会いそうなところには行かない方がいいんだろう、多分。

適当に道を変えて車を走らせたら、思いのほか時間がかかり、いつもより10分ほど遅れて病院に着いた。

「榊原先生、おはようございます。珍しく遅かったですね。」

「おはようございます、遅刻するかと思ってひやひやでした。」

「そんなに道混んでいたんですか？」

「いえ、ちよつといつもと違う道から来たら、時間がかかって。」

「なんでまた、道を変えたんです？」

正直な理由を説明するのは微妙なので、

「いやあ、ちよつと、気分転換、かな？」

「気分転換、ですか。まあ、榊原先生はまじめだからなあ。」

でも、そんな通勤経路変わるくらいで、気分転換になるんですか

？」

「ええ、まあ。」

「へえ……。」

「さ、仕事仕事。今日も頑張りましょう。」

「なんだかなあ……。」

さて、帰ろう、というときになって、隆之から電話がかかってきた。

『海か？悪いな、仕事中に。』

「もう帰るところだったから。どうかした？」

『いや、今週どこかで会わないかな、と思ってさ。』

「どうしたんだ？珍しいな。」

『まあね、ちよつとね。』

「いつでもいいよ、今週は珍しく夜勤がないんだ。」

『じゃあ、水曜日はどうだ？』

「いいよ、じゃあ、20時にいつものバーかな？」

『そうだな、そうしよう。蕎子も誘うか。』

「いや、それはまずいんだ。二人で会おう。」

『なんだ？喧嘩でもしたのか？』

「喧嘩でもしたんだったらわかりやすくていいんだけどね。」

『また、いつもの姫の難問か？』

「ま、そんなところ。月に帰らないように、僕はいつでも挑戦者だよ。」

『はは、じゃあ、会ったときにゆつくり聞かせろよ。』

「了解。水曜日にまた。」

『ああ、またな。』

今頃蕎子は何をしているのだろうか。

たいてい会うのは週末で、たまにお互い仕事が早かったときには一緒に夕食を食べる。

二人、もしくは隆之と三人で飲みに行くこともある。

メールはたいてい1日1回、きょうのできことのメールが送られてくる。

僕も同じようにメールを返信するが、あまり電話はしない。お互い電話には出られないことが多いから。

ぼんやりと薺子のことを思っていると、急に不安になる。

なぜ、薺子のことを忘れと思うのだろう。

1週間会わなかったら、薺子は僕のことを忘れるのだろうか？

そもそも忘れなくて、何なんだ？

考えてもわからないのが、薺子だといえ……。

ぼんやりしているとろくなことを考えない。

早く眠ってしまうに限る。

どうせ今日はメールは来ないんだから。

「よ。」

「久しぶりだな、元気だった？」

「元気だよ。海は？」

「うーん、まあ、ぼちぼちだね。」

「薺子か、何があった？」

「……1週間会わなかったら薺子のこと忘れるかって、聞かれてさ」

「忘れるってどういう意味だ？」

「それがわかったら苦労しないと思わないか？」

「ああ、それを聞いても答えるようなやつじゃないか」

「ご名答」

「忘れる、なあ……。記憶喪失にでもならない限り、あいつのことは忘れないだろう。」

「普通の回答はそれだよねえ」

「そうだな。普通のは、な。でも、薺子だからな。」

「そっなんだよね、薺子だからね。」

「いい加減、疲れた、とかいうか？」

「・・・疲れた、とは言わないよ。ただ、蕎子は僕のことを忘れるのかな？」

「何をバカなことを」

「忘れると思うから、僕と1週間会わないのかな、って。」

「・・・意外とろくなこと考えないやつだったよな、お前」

「それこそ今更でしょう？」

「まあ、そうでした。そういうやつでした、海さんは。」

「あー、考えてると気が滅入る。飲むぞ、今日は。」

「はいはい、そうしよう。飲もうな。」

隆之はいつも、誰にでもやさしい。

皆が僕がやさしいと言ったことが多いが、本当にやさしいのは隆之のほうだ。

「お前こそ、どうしたの、珍しいよな、事前に誘うなんて。」

「俺も人間ですから、へこむこともあるわけだ。」

「なんだ？うまくいってないの？」

「お前同様、だけど違う意味で障害が多いんでね、俺の恋は。」

「うーん、なるほどね。」

「とりあえず、何も愚痴る気はないんだけど、海に会いたくなかったのさ」

「口説くなよ、心細いんだから優しくされてうっかりなびくと困るからな。」

「口説かねーよ。お前口説くくらいなら、もっと前に口説いてるよ。俺は基本的に人のものは口説かないんだっつーの。」

「わかってるけどさ。」

「・・・なんだ、口説いて欲しいのか？」

「うーん、よく考えるとわからない姫の気持ちより、隆之のことのほうが

わかるかもしれないからなあ。」

「うわ、なんだそりゃ。」

「まあ、大丈夫だよ。俺もちょっとやさしくして欲しいだけだから。」

「結構参ってるなあ・・・大丈夫か？」

「あんまりやさしくしないでっ。やさしくされると泣いちゃうわっ」
「その百年の恋も冷めるような言葉遣い、頼むからやめてくれたまえ」

「いいじゃん、たまには。可憐な言葉遣いも。」

「どこが可憐なのか、お願いだから教えてくれよ。」

バカな話は、バカさ加減が高いほど、気はまぎれる。

最高の相方を得て、その日はお互いかなりのハイテンションで、すっかり飲みすぎてしまった。

金曜日、ようやくあと2日、というところまで漕ぎ着けた。
なんだって、こんな我慢をしなくちゃいけないのかわからなくなっている。

普通に過ごしていればそんなに意識したこともない蕎子のことだが、
どうも暇になると蕎子のことを考えてしまう。

いつも無意識のうちに考えているのかもしれないが、
今は考えていると、でも会えないんだから、とストップがかかって
気づく感じ。

回数はとても多く、仕事中でもプライベートでも、暇な時間は必ず。
どうかしているのかな、僕は。
忘れるどころか、かえって考えすぎだ。

蕎子と付き合い始めてもうすぐ6年になる。
今でも時々不安になる。

僕の手の届かないところに帰ってしまわないか。
月の姫は月に帰ったほうが幸せなのだろうか。
そしてその月には、誰が住んでいるんだろうか。

土曜の夜、何故かロールキャベツが食べたくなった僕は、

一人しか食べる人間はいないというのになべ一杯のロールキャベツを作り始めた。

煮込む際に入れた白ワインを飲みながら、出来上がりを待っている
と、

その日に限って白ワインがよく回り、ロールキャベツより先に
僕が出来上がってしまった。

しかたなく、ロールキャベツの火を止め、ベットに寝転んだ。

その日の夢は最悪だった……。

『私、月に帰らなくてはいけないみたい。』

『どうしてですか、姫。だって君は僕と一緒にいるって言ったじゃ
ありませんか。』

『うん、いようと思っていたんだけど、いたいなと思っていたんだ
けど、

やっぱり月の人間は月に帰らないとダメだって、隆之が言うんだ
もの。』

『た、隆之?!』

『悪いな、海。俺も実は月の人間でな、蕎子と一緒に月に帰って幸
せに暮らすよ。』

祝福してくれるだろう?』

『そんな……』

『じゃあ、海ちゃん元気だね。素敵なお嫁さん見つけて幸せに暮ら
してね。』

私たちも幸せに暮らすから。』

『姫~~~~~』

驚いて飛び起きるとまだ11時だった。

あまりにもベタな設定すぎて、ちよつと自分に嫌気がさす。

そう、僕が告白する前に、蕎子は隆之に告白して振られている。

それからあの二人は、しっかり親友というスタンスを保って今日ま

で来た。

今でもたまに思うんだ。

僕が告白したのと同時に蕎子も僕に告白してくれた。

何故僕でよかったんだろう。

それこそ、蕎子はあの当時何人ものやつから告白されていた。

それをことごとく振りまくって、僕と隆之はそいつらの自棄酒に付き合わされたものだ。

でも少なくとも大学に入ってから蕎子が告白したのは、僕の前には隆之ただ一人。

そして、それを知っているのは、当事者の二人と、僕だけだった。

日曜日の目覚めは最悪だ。

最悪な夢の後、さらに飲みなおしてベッドへ倒れこんだせいなので、自業自得とはいえ頭ががんがんする。

無理やり昨日作ったロールキャベツとコーヒーをランチにして、僕はちよつと早いが、待ち合わせのカフェに向かった。

「いらつしやいませ。海さん。」

カフェにはお客さんが二組。

マスターは先週僕らの座っていた席に、手書きの「予約」という札をおいてくれていた。

「すみませんね、しょぼい札で。普段予約なんて受けないもので。」

「ほんとうにご迷惑おかけしてすみません。」

「いいえ、お気遣いなく。ご注文はどうされますか？」

蕎子さんがいらしてからのほうがいいですか？」

「あ、いいえ、先に。コーヒーをください。」

「海さんがコーヒーって、珍しいですね。」

「ははは。ちよつと昨日中途半端に飲んだら二日酔いっぽくて頭痛いんですよ。」

「それはそれは。それもまた珍しい。」

「ほとんどならないんですけどね、二日酔い。」

「・・・、ほんとに連絡取らなかったんですか？蕎子さんと。」

「はい・・・、なんかだんだんばかばかしいと思ったんですけどね。」

「・・・、海さんは優しいですねえ。」

「優しいのとは違う気がします。単に僕は、ガラッ

そこまで言いかけたところで、カフェの引き戸が開いて、蕎子が入ってきた。

1週間ぶりの蕎子は、ちつとも変わらない。

変わらないのに、なんだか幻を見ているような気がした。

「こんにちは、マスター。あ、海ちゃん。」

につこりと満面の笑みを浮かべると、僕の向かいの席に座る。

よく見ると、大きな紙袋をぶら下げている。

「いらつしゃい、蕎子さん。ご注文は？」

「あ、ミルクティください。美味しい紅茶に飢えてるの。」

「はい、了解しました。」

注文を終えると、にこにこ僕に笑いかける。

まるで一週間前のあの約束なんてなかったみたいに。

「海ちゃん、元気だった？」

「うん、蕎子は？」

「うん、元気だよ。ちょっと移動が多くてつらかったけど。

はい、おみやげ。」

「・・・は？」

「あれ？だから、おみやげ、ニューヨークの。」

「・・・蕎子、ニューヨークに行ってたの？」

「うん、そう。え？なんで知らないの？忘れちゃったの？」

「え？聞いてないよ、全然。」

「あれ？月曜から学会でね、昨日戻ってきたの。」

だからちようど1週間会えないから、来週ここで会おうって言う

てたじゃない？」

「い、いや、そうは言わなかったんだけど。」

あれ、おかしいなあ、とつぶやきながら首を傾げる蕎子を見ながら、僕はそつとため息をつく。

蕎子との付き合いも6年目だ、なんとなく飲み込めてきた。

マスターが飲み物を運びがてら、

「蕎子さん、先週は海さんに、1週間会わないように試してみよう、って言ってみましたよ。」

「あれ？」

だんだんわかってきた僕は、なんだかどつと疲れてきた。

「蕎子さ、真理さんと出張中のことなんか話した？」

「うん、そうなの、聞いてよ。真理ちゃんも一緒だったの、学会。そしたら真理ちゃんが『1週間もニューヨークなんて、

遠藤君、私のこと忘れないかしら』って。

相変わらずモテモテらしいわね、遠藤君。

真理ちゃんにベタばれなの知ってるくせに心配してるから、

『そんなことあるわけないでしょ、1週間くらいで忘れたりしないわよ』って話した。」

「そう、それで、先週僕と話しているとき、僕も1週間会わないと蕎子のこと忘れるかなって、思った？」

「うん。」

・・・多分蕎子はあの時、ほんとうは「1週間あえないし、電話も難しい」

と言いたかったのだ。

「蕎子はさ、先週『会わない、会いそうなところにもいないし電話もしない。』

それでも忘れないか試してみよう。』って言ったんだよ。」

「え？私そんなこと言ったの？」

「うん、言ったんだよ。」

「し、信じられない……。そんなに考え込んでたつもりなかった

のに、私。」

「かなりすごい変換されてるだろう？」

「うん……。」

わかってみればなんてことないのだ。

蕎子は昔から、何かを考えすぎて、考え事をしながら話すから、異常に中途半端な変換がかかることがある。

「海ちゃん、怒ってる？」

「いや、怒ってはいないけどね、ちょっと疲れてる。」

「ご、ごめんなさい……。」

消え入るように謝りながら、ぱつと席を立つと、マスターへ持参したお土産を

渡しに行く。

まったく、この人は……。

「ねえ、海ちゃん、本当に怒ってない？」

「こんなことで怒っていたら、僕は心臓がいくつあっても足りない。」

「

カフェを出て、ゆっくり僕の家へ向かいながら、蕎子が聞く。

「ほんとにごめんね、海ちゃん。」

「ねえ、蕎子。蕎子は1週間僕と会えなくて、僕のこと忘れてた？」

「ううん、逆かな。いっぱい海ちゃんに話したいことがあるのに、

ちつとも話せなくて、いつも海ちゃんのこと考えてた。」

「……そう。」

「海ちゃんは？」

「僕は、かぐや姫が月に帰る夢まで見てしまった。」

「？それは私のことなの？」

「そう。しかも月の住人は隆之で、二人で幸せになるって。」

突然道にしゃがみこむので、どうしたのかと見ると、蕎子はひたすら笑っている。

「お……おかしい……。くっ……。あはははははっ……。なん

でっ・・・」

「笑い事じゃないんだけどな・・・」

「だって、なんで隆之と月に行かないといけない・・・あははははっ」

「ほんとに笑い事じゃないんだってば」

しやがみこむ蕎子を抱き抱えると、笑いながら僕に抱きついてくる。

「おかしいよ、海ちゃん。おかしい。」

「僕は不安だったよ。蕎子が僕のこと忘れるんじゃないかって。」

「そんなことあるわけないでしょう？」

暖かいやわらかい両手が、僕の頬をはさむように触れる。

「海ちゃんのこと、大好きだよ。」

そっと触れる唇は、もっと柔らかく、腕の中に蕎子を抱きしめて、僕はようやくほっとする。

・・・できるだけ長く、地上にいてくれ、僕の月の姫君。

一切れの其れを分けて（前書き）

大変古いアニメに「名犬ジヨリイ」と言うのがあって、内容は全く覚えてませんが、主題歌だけはOPもEDも覚えていた

り。

薔子と真理絵のガールズトーク？です。

また飲んでます。

お題は【Abandon】様よりお借りしております。
愛したい10のお題

<http://haruka.saiin.net/title/0/>

一切れの其れを分けて

● 一切れの其れを分けて

いつもいつもあなたにときどきしているなんて、
ちょっとかわいらしいことを私が言ったら、変、かしら・・・。

「まあ、熱があるんじゃないかと思うわね、普通」

「真理ちゃん・・・、いつもながらひどすぎるよ・・・。」

職場近くのレストランで、今日は真理ちゃんと待ち合わせだ。

明日は休み、真理ちゃんも明日は午後から、ということ、

久しぶりに女同士しゃべり倒そう！というのが今夜のテーマ。

真理ちゃんは、大学が一緒、研究室も一緒、もちろん専攻が一緒
てことは

職業も一緒になり・・・、そう、私たち二人は監察医です・・・。

なので、二人で会うときは、絶対に仕事の話は厳禁、と決めていま
す。

別に解剖の話をしながらご飯を食べることは、全く問題ないけれど、
一応秘密保持を定められている職業についている以上、情報漏えい
はご法度。

というより、仕事についてはじめて会ったとき、あまりにも仕事の
話で盛り上がり、

うるさい居酒屋だったのに、いつの間にか私たちの周りだけ席が空
いてしまって、

お店の人に営業妨害だと怒られたからだったり・・・。

やっぱり解剖周りの話をしてしまったのがいけなかった・・・。

「あんたは、どうしてそう学習能力がないのかしら。」

「なによ、それ」

「いいこと？世の中の人が、佐伯薺子に持つ印象その１．

『派手でおつかね、ねーちゃんが現れたもんだぜ』」

「ひどいよ、真理ちゃん・・・」

「だって仕方ないじゃない、あんたおとなしくしてても、派手な美人なんだもん。」

よかつたわね、バブルの時代だったら、どう考えてもボディコン着ないと

違う意味で世間が許さなかったと思うわよ。」

「だから、派手な格好なんてちつともしてないじゃない。」

「あんたが着ると、白いシャツでも限りなく色っぽくなるんだから仕方ないじゃない。」

「真理ちゃんの意地悪・・・」

「そのくせ一生懸命になればなるほど、感じ悪い女になるからね。」

「そんなことないもん・・・」

「そんなことあります。それがいちいち正論だから、相手はむかつくわけよ。」

よかつたわよね、あんたのお相手が市村警部とか、隆之で。」

「市村警部は、一回も私のこと怖いだのなんだの言ったことないわよ！」

「当たり前でしょう、「鬼の市村」がそんなこと言うわけないじゃない。」

「・・・ほんとにひどいよ、真理ちゃん・・・」

担当所轄の課長さんである市村警部は、それはそれは話のわかる人で、

部下からの信頼も厚く、また、うちの監察医務院のボス、森山さんと大の仲良しなのだ。

そのおかげで、私も現場ではずいぶん助かっている。

そして、その市村警部のところにこの前配属されたのが、大学時代からの親友、斉藤隆之なのだ。

医学部を卒業して、医師免許を持ちながら、何故か刑事の道を進み

始め、

いわゆるエリートというやつで、すでに階級は警視というやつらしい。

あのすばらしい市村警部より上なんて、生意気すぎ。

「で、遠藤君は元気？」

「話をそらしたわね、まあいいわ、元気よ。」

あの人も医局でいろいろ巻き込まれるの苦手だからね、居心地いいみたい。」

「そう、よかったわ。それにしても驚いた、海ちゃんと同じところに行くなんて。」

「まあ、あそこは、うちの系列病院だからね、ありえない話ではないでしょ。」

それよりも、海君は大学に続ける人だと思ってたわ。」

「私もそう思ってただけだね・・・。」

海ちゃんは、医師として働いている。

大学の系列だけど、大学病院ではないところに、早々に派遣されている。

そのまま大学病院からは離れる方向で考えているようだ。

「海君のうちって、お医者さんだったっけ？」

「うん、街の開業医さん。」

大きくはないけど、優しいお父さんがそれこそ街のみんなの家庭医って感じてね、

すごく素敵だよ。」

「そういうのも大変だけど、すごい仕事よね。」

「海ちゃんのお兄さんは、研究肌だから、今アメリカに留学している、

ずっとそういう最先端の研究を続けたいと思っているみたい。」

「お姉さんは？」

「お姉さんは、理系だけど、地質学の教授だからね。」

医者の仕事はどうでもよかったみたい。

もう一人のお姉さんは小説家だし。」

「面白い家よね、海君のところ。」

「海ちゃんはお父さんの仕事のやり方は好きみたいだから、

跡を継ぐことも考えてはいるみたい。」

「外科医としては、かなり腕がいいって、評判聞いたよ、遠藤君がら。」

「うん、そうみたいだね。私も聞いた。」

海ちゃんは、まだまだ若手ながら、その器用さで将来有望な外科医だ。

外科医には繊細さと器用さ、そして力強さといったバランスが求められるが、

海ちゃんはそれをうまくコントロールしているらしい。

上司の石川先生は、華麗なる美人外科医だが、ずいぶん海ちゃんのことを

高く評価している。

「たまにね、すごくたまにね、思うことがあるの。」
「何を？」

「いつまで海ちゃんといてもいいのかなあ、って。」

「はあ？何よそれは？」

「いつか、お別れしないといけないときが来るのかなあ、って。」

「それは死に別れるとかそういうこと？」

「いや、もっと手前のことなんですけど。」

「もっと手前って・・・？」

「今は海ちゃんと一緒にいられるでしょう？」

でも、いつか海ちゃんは新しい誰かを見つけて、どこかに行っち

やうんじゃないかなあ、

って」

「何をバカなことを考えているわけ？ 蕎子さんは？」

「バカなことなんて百も承知だもん。」

でも、海ちゃん優しいし素敵だし、どこの誰が好きになったっておかしくないもん。」

「それは、激しく、のろけているのかしら？」

「いや、そういうわけじゃ」

「そうよね・・・、ああ、だいがこのバカに慣れてきてたと思ってただ、

まだまだアタシも甘かったわ・・・」

「真理ちゃん・・・、ひどいよ、バカバカ言って・・・」

「ほんとにバカじゃないの？ 本気で言ってるところがバカなのよねえ・・・。」

もうわかった、許さないわよ、飲みなさい、ほら」

「うえ〜ん、真理ちゃん・・・」

「うえ〜ん、じゃないわよ、このばか。」

「ほんとに大バカなのよねえ・・・。本気で海君が他の女に手を出す」

思ってるのかしら？」

散々飲ませてつぶした蕎子を横目で見ながら、真理絵はマティーニをあおる。

食事をしていたレストランでワインを2本空け、その後このバーに来た。

すばらしい居心地のバーだ。

真理絵と蕎子、海、隆之、そして真理絵の最愛の遠藤君は、

大酒飲みだが騒がしくないせいか、このバーではマスターをはじめ全ての人に

好感を持って迎えてもらえているのだった。

いつも酔いつぶれるのは蕎子だけでしかもすやすや眠りこけるだけ、それにも慣れているため、かなりの頻度で誰かはやってきているのだった。

「蕎子さん、寝ちゃったんですね。」

そつと蕎子の肩にシヨールをかけてくれながら、バーテンの一人が言う。

「すみません、いつも。」

いつも眠りこける蕎子のために、シヨールを置いてくれているのだった。

「いいえ、こちらが見ていてもいつも楽しいですからね、皆さんは。」

「今日はねえ、ちよつと意識的につぶしてやったもので、早かったの。」

「つぶしたんですか。おやまあ。」

カウンターの中间にいるマスターが、驚いた顔をする。

「あんまりバカなこと言ってるものだから。いいの、この人明日お休みなんです。」

「そうですか、それなら安心ですね。そういう真理絵さんは明日は？」

「明日は昼からなので、やっぱりゆっくりです。」

ちよつとだけ電話してきますので、蕎子このままにしておいてもいいですか？」

「ええ、かまいませんよ、ごゆっくり。」

「ありがとうございます。」

真理絵はスツールを降りると、ゆっくり店の外に出た。居心地のいいお店で、電話をするのは嫌いなのだ。

電話は2本。1本は遠藤君への電話だった。

「と、いうわけで、蕎子をつぶしてしまったので、これから行ってもいい？」

「というわけで、って、何の説明もしてない気がするが……。」

「まあまあ、堅いこと言わない。遠藤君明日は早いのか？」

「真理絵と同じく昼からだから大丈夫。一人で来られるのか？」

「うん、タクシーで行くから大丈夫。じゃあ、また後で。」

「ああ、気をつけて。」

そしてもう1本はもちろん……。

「今、バツカスにいるので、お迎えよろしくね。」

「って、真理さん、また蕎子つぶしたの？」

「もちろん！」

「……そうですか……。」

「蕎子がバカなこと言ってたわよ、また。」

「バカなことって？」

「聞きたかったら、早く来てください。」

「……ハイ。」

席に戻っても、蕎子はすやすや眠っている。

「私、もう1杯いただこうかな。」

「じゃあ、チェリー・ブロッサムなんていかがですか？」

「いいですね、そろそろ咲きそうだし。」

「では、お作りしましょう。」

全く、と思う。

こんなに皆に愛されていると言うのに、何が不安なのだろう。

まあ、これで幸せの上にあぐらをかいたら蕎子ではないのだろう。

見かけによらない繊細さと、見かけどおりの気の強さを持つ、かわいい友達。

誤解も受けやすい彼女と、なぜかここまで友情が続いているのは、一重に蕎子の素直さが理由だろう。

潔いほどの素直さに、時々いけない大人になった自分と比べてしま
う気持ちが出てくる。

しかしそんな時には、この人に負けない自分でいようと思うのだ。
彼女が誇りに思える友達でいようと。

「子供の頃に見たアニメのエンディングの歌がね、すごいんですよ。」

「すごい歌ですか……。どんな？」

「なんでも飼っている犬と半分こ、って歌。ビスケツトもいいことも悲しみも。」

「多分パンも一切れあったら、分け合うの。」

「それがすごい、ですか？」

「だって、犬なんですよ。犬なんだけど大切な友達で、何かいいことが起こっても、

その気持ちをわけあうんです。なんて純粹なんだろう、って。」

「純粹、ですか。」

「そう、どっかの誰かさんがいいそうなことなんですよねえ。」

でも私はいい加減オトナなもので、ついむかつてつぶしちゃうんです。

「いいから独り占めしときなさい、って。」

「そんな真理絵さんも、素敵だと思いますよ。純粹だって思いますけどね。」

「そんなことないんです、私は。」

「まあ、自分でそうはおっしゃらないでしょうね。」

マスターはそういういながら、そっとピンク色のカクテルを置いてくれた。

一口飲むと、去年の春を思い出す。

「また今年も、お花見の後、ここに来てもいいですか？」

「ええ。どうぞ、大歓迎ですよ。」

「よかった、皆でまた伺います。そのとき、またこれを飲ませてくださいね。」

私、これを飲まないと、桜が咲いた気分にならないんですよ。「うれしいですね、ぜひお越しください。」

「はい。」

あの歌は、犬と半分こだったけど、蕎子は海君と半分こにすればいい。

一切れのパンがあつたら、二人で分けていけばいい。

喜びも、悲しみも、恐れも不安も、一人だけが持つものじゃないから。

皆が持っているものだから、二人で考えればいいのだ。

カランカラン・・・

「ようやくナイトのご登場ですわね。」

「おまたせいたしました、姫。っていうか、つぶすなよ、毎回。」

ああ、すみません、僕車なのでシャーリーテンプルください。シャーリーテンプルはノンアルコールのカクテル。

最近の海君のお気に入りだ。

「しょうがないでしょう、つぶれるんだから。」

「まあねえ。ほんとに真理さんと飲むとつぶれるね。安心してつてるんだなあ。」

「お仕置きよ、今日は。『いつまで海ちゃんといられるかなあ』、なんて言ってたわよ。」

わざと蕎子の真似をして言ってみると、海君は嫌そうな顔をする。

「・・・なんだ、それ。」

「だから、お仕置き。ちゃんと持って帰って頂戴ね。」

「持って帰れて・・・、ある意味すごいよね。」

「信頼してますから、私。」

「はあ、胸に刻んでおきますよ。」

つと、真理さんはどこ帰るの？遠藤のところなら、送るよ？」

「うん、そうなんだけど、もう一杯だけ飲んで行きたいから、先に帰って？」

「・・・わかった。じゃあ、お先に。飲み過ぎないようにね、

「つてもう遅いけど。」

「余計なお世話よ。じゃあね。」

海君が蕎子を抱き上げて、帰っていった。

送ってもらえば楽なのだが、なんとなくそんな気分ではなかったのだ。

気づけばチェリー・ブロッサムもなくなっていた。

「ああ、最後は何にしようかなあ・・・。」

「じゃあ、ホワイトレディにでもしておいたら？」

後ろから、急に知っている声がして驚く。

「遠藤君・・・。」

「俺はビターソーダをお願いします。」

「どうして？」

「なんとなく。」

遠藤君は元ラグビー部で、割と無口でかなりごつい見かけだが、蕎子と同じくらい繊細だ。

私がおか考え込んでいると、すぐに心配してくれてしまう。

今日、ふと思ったことを持ち越さないために、もう一杯飲んでこの人のところに

行こうとしたのに、本人が来てしまった。

「いつも言っているけど。」

「考えてないで、早く俺のところに来い。」

「へ？」

「考え込むと、いい結果出さないから、真理絵は。」

そんな風に時間を無駄にするくらいなら、俺の顔見て酒を飲め。」

「遠藤君の顔を見てお酒を飲むと、考え込まないの？」

「少なくとも、俺のことだけ考えるだろ？」

「・・・笑える・・・。。大爆笑だ・・・。。」

声も出せずに笑っている私の頭を、ばんぽんとたたいて、遠藤君が続ける。

「笑っててもいいけどな、ちょっと恥ずかしいからな、あんまり言わせないように。」

「ごめんごめん……。でも、すごい自信だね……。」

「当たり前。そのくらいの自信がないと、お前と付き合っていられないだろう?。」

!!

薔子、ここに私と一つの幸せを分け合ってくれる人がいるみたい。きつとそうだって、信じていたけど。

やっぱりそうだ、って、うれしいことだね。

アダムとイヴの関係について解け（前書き）

ものすごく久しぶりになりましたが。。。

薔子、落ち込み編です。

外からは自信たっぷりに見える人でも、多分すごく自身がなかったりすることもあるかな、ということ。

職業上の表現部分は、もはやファンタジーに近い、ねつ造です。

なので、「そんなことあるか！」と思わず、「へー」と、流してください。。。

ご都合主義で、よろしく！（笑）

アダムとイヴの関係について解け

今日はお使いで、海ちゃんの病院にやってきた。

うちのボスには、この病院に大学時代からの友人で、いまだに共同研究を続けている人がいる。

夕方から明日1日は休みなので、その人へ書類を渡すお使いを買って出たのだ。

「えーと、海ちゃんは、と。」

部屋を出て、海ちゃんに連絡してもらおうと受付に向かう途中。それは偶然目に入った。見てしまった。

大急ぎで受付に向かった私は、すでに顔見知りになった受付のおばちゃんに

連絡をお願いしていた。

「すみません、小児科の石浜先生にご連絡していただけますか。」

もしお時間があるようでしたら、お目にかかりたい、と。」

行先はもう1か所あるが、今の気分的にはこっちだろう、どう考えても。

「で、どうしたんですか、本当に。」

薫先生の部屋では、いつもインスタントではないちゃんとしたコーヒーが出てくる。

別にそれが目当てで来るわけではないけれど。

「やっぱり先生の淹れてくれるコーヒー、おいしいなあ。」

そっと渡されたコーヒーを一口飲んで、ふーっと、息を吐く。

石浜薫先生は、海ちゃんと同じ、この病院の小児科の先生だ。

そして、大親友で今は刑事をやっている斉藤隆之の愛する人だ。
薫先生も、隆之の気持ちを受け止めてくれて、今は二人とも幸せそう
だ。

ちなみに男性だが、どっちも。

まー、そういうことだ。

「また、榊原先生とけんかしたんですか？」

こちらを心配そうに見ながら先生が言う。

「違いますよ、けんかなんてしてませんよ。ただ・・・、目に入っ
たから。」

「何が？」

薫先生は小児科の先生だ。

だから、おとなのようにうまく自分の気持ちを伝えられない子供の
相手も

たくさんしている。

そのせいだろうか、あまり結論を急がない。

話していても質問はしても追い詰めない。せかさない。
だから薫先生のところは居心地がいい。

そんな気がする。

もう一方の友達、遠藤君の所へ行ってもいいのだけれど、

何となくほっとしたいときは薫先生のところ、

少し馬鹿話をしたときは遠藤君のところだ。

（ふつうにまじめで割と無口なのだが面白いのだ、遠藤君は。）

「廊下で、海ちゃんが人と話していたんです。」

「そりゃあ、人と話すこともあるでしょう。」

そりゃあそうだ。お医者さんだもん、患者さんと話したり、看護婦
さんや

病院の関係者の皆さんとお話するだろう。

でも、違う。

「きれいな女の人と、話してました。」

育ちのよさそうな、淡いピンクのチャネルスーツみたいな着た

人。

黒髪のストレートで、お上品を絵にかいたような、淡いバラミタいな人。」

そうなのだ、また見てしまったのだ。

これで何度目だろう、しかも全部別の女性だが。みんな一樣にお嬢様の雰囲気醸し出している。

「ああ……。」

薫先生にも何か思い当ることがあったのだろうか。そのまま口を閉ざしてしまった。

私の大好きな人は、この病院の外科医だが、腕もよくて見かけも悪くなくて、性格もいい。私が言うのもなんだが、なんでこんなにいい人が私の彼氏なのかと、たまに思う。

ノロケではなく、ある種の恐怖感とともに。

そしてそんな人はもちろん上司や教授の覚えもめでたい。将来有望ってやつだ。

ということは当然、婿候補に挙げられまくるわけで。

お嬢さん方も、いやいや変なやつのところに行くのに比べて、性格いいし見かけもいいし将来有望とくれば、ほおっておかない。

このチャンス逃したら、見かけはよくて将来有望だけど、

全く誠実さのかけらもない男と結婚させられるかもしれない現実もあるわけだ。

その点、かなりのお勧め物件というわけで、毎月婚約者候補がひきもきらない。

勝手に見合いさせられてることもある。

もつと海ちゃん本人は見合いだと気付かず、あとからすごい驚いているのだが。

「いつもね、思っんですよ。」

私は机に突っ伏しながらつぶやく。

「私は海ちゃんといつまで一緒にいられるのかなあ、って。」

薫先生が、え、とかすかにつぶやくのが聞こえた。

そうか、真理ちゃんにはしょっちゅう言ってるけど、先生には初めてかな？

「だってあんなにいい人が、なんで私と一緒にいるんだろうって思うんです。」

だから、いつかお別れして、海ちゃんはもっと素敵な人と一緒にどこかに行っちゃうのかなあ、って。

でも、私馬鹿だから、全然そういう心の準備ができなくて、見かけてはショックでたまらなくなつて、バツカスで飲んだくれたり、

家で豪華料理作りまくってやけ食いしたり、いろいろしてるんです。」

「ああ、貴方と初めて会った時も、やけ酒飲んでましたね。」
ちよつと笑つて薫先生が言う。

そう、薫先生が隆之に連れられてバツカスという私たちが常連になつているバーに

初めて来たとき、軽く挨拶はした。

だって、隆之が好きな人なんだろう、ってすぐにわかったから。でも、なんでこんなになつているかというと、

やけ酒を飲んでいるときにやさしくしてもらつたからだ。

それは、隆之はまだ告白していなくて、ため息ばかりついて考え事をしていて、

薫先生はバツカスが気に入って、一人でも来たりし始めたころだった。

やっぱり海ちゃんが駐車場のところできれいなお嬢さんと話しているのを見て、

いてもたつてもいられなくてダッシュでバツカスに駆け込み、飲んで

だ。

私はお酒は弱い方ではないと思うが、だいたい仲間たちのだれかと飲むと

必ずつぶされて寝ている。

しかし、ひとりで飲んでいる、もしくは仲間たち以外の人と飲んでいるときは、

決してむちゃな飲み方はしない。

でも、その時は違った。

なぜなら1ヶ月で3人目だったからだ。。。

いずれ劣らずきれいな上品な女性たちで、育ちのよさそうな高そうなお召し物と

いかにもな立ち居振る舞いに、私はノックアウトされていた。

いやー、なんて私とは大違い。。。

なじみの店という安心感も手伝って、いつもより相当早いスピードで、飲んだ。

私の酒量を把握しているマスターが少し心配し始めたころ、薫先生がやってきた。

すでにご機嫌になっていた私は、早速なれなれしく彼と飲み始め、すっかり楽しくなって、そしていつの間にか眠ってしまった。

『蕎子さん、蕎子さん、起きれますか？』

『えっ！』

気が付いたら、そつと薫先生に肩を揺すられていた。

げっ、私、寝ていた？？

『具合は悪くありませんか？そろそろ閉店のようなのですが。』

『あっ、だ、大丈夫です。元氣です！あ、あの・・・すみません、私。』

なんてことだ、まだ何度かしかあったことない人と飲んでいたのに、すっかり寝てしまうなんて。

酔いではなくその事実を青ざめながら、ぐるぐると悩みこんで謝ると、

「いえ、大丈夫ですよ。静かに眠っていらつしやいましたし、マスターもそのうち起きますよ、とおっしゃっていたので。かわいらしい寝顔を見ながら、おいしいお酒をいただいてましたから、

役得ですかね。」

そう、にっこり笑ってくれたのだ。

それ以来、何かあった時の避難場所が、一か所増えた。

「そうですね、確かに榊原先生はもてるかもしれせんね。」
にこにこ薫先生は言う。

うう、そうなんだもん、もてるんだもん。

大学時代だって、本人がうっかりだっただけで、かなり周りには海ちゃんを

好きだった子もたくさんいたんだもの。

「でも、だいたいあなたが見かけているのは教授たちのお嬢さんでしょう？」

榊原先生は、そういうことでの出世はお望みのようには見えませんし、

毎回しっかりお断りされている様子ですよ。

こんなピラミッドの中で、断っても全く評価が落ちないのはある意味

すごいことですけどね。」

だいたい教授のお嬢さんとの結婚は、出世への近道だ。

それくらいは私にだってわかる。

そして、毎回断っている様子なことも。

「それにね、どんなにあなたが言うところの上品できれいなお嬢さんがいたとしても、

榊原先生にとって、意味のある人は一人だけだと思いますけどね。

「意味がある？」

どういう意味だろう。海ちゃんにとって意味がある人？

「アダムとイヴはご存知ですよ。アダムは最初の人間、イヴはアダムの共に

暮らすために作られた女性。

まあ、ジェンダーとかそういう問題はとりあえずおいといて、アダムとイヴにとって、それぞれ一緒にいるべき相手はお互いしかいなかった。

まあ、選択の余地はなかったわけですが、とりあえずね。

現代、アダムとイヴの末裔たちはこんなにも増えて、相手はたくさんいる。

でも、そんな世の中としても、やっぱりアダムにとってイヴは一人なんだと思いますよ。

一緒にいたいと、

いるべきだと思う存在は一人なんですよ。」

まあ、私たちの場合は、アダムとイヴの関係からちよつと外れてるかもしれませんが、

本質はおんなじだと思います。

そう言つて、また薫先生はニコツと笑う。

「つまり、榊原先生にとって、イヴは一人だけ、貴方だけのことでしょう？」

貴方だけが居並ぶ女性たちの中で、榊原先生にとって意味のある存在なんですよ。」

・・・・・・絶句した。

本当にそうだろうか。

本当にそうだといい。

だって、私にとつても、居並ぶ男性たちの中で、海ちゃんだけだ。

こんなにそばにいてほしいと思う人は。

女性たちに囲まれているのを見て、離れて行ってしまうことを思い、悲しいと思うのは。

「まずは、率直な気持ちをお話しされてみた方がいいと思いますよ。

榊原先生だつて一方的に思われていても、困ってしまうでしょう？
説明する時間をあげるのは必要なことだと思いますよ。

それでももしうまくないのだとしたら、またやけ酒に誘ってください。

いくらでも付き合いますよ。

その間、榊原先生には斉藤さんを派遣しますから。」

今日はそのコーヒーを飲んだら帰りなさい、ね？

そう言つて、夕陽を背に、薫先生がまたほほ笑む。

ここに来たときからほとんど笑顔を絶やさない先生だが、
今が一番につこり笑つてくれた気がする。

私は言葉が出ず、こくんとうなずいてコーヒーを飲みほす。
まるで小さな子供のように、何も言わず。

病院を出たときには、あたりは少し薄暗くなり始めていた。

私は海ちゃんの携帯に電話をかける。

仕事中には出ないはずだから、問題ない。

呼び出し音が数回鳴つて、留守番電話に変わる。

心を落ち着け、一気に話す。

「もしもし、薔子です。お仕事お疲れさま。

会いたいです。

バツカスに寄つてから、家に帰ります。」

ここまで言つと、留守番電話は終わってしまった。

いきなりこんなの残っていたら、海ちゃんはどう思うんだろう？

呆れながら、でも、来てくれるんだろうか。

お仕事、早く上がれるといいんだけど。

そう思いながら、私はバツカスに向かって歩き出した。

アダムとイヴの関係について解け（後書き）

お題は【Abandon】様よりお借りしております。
愛したい10のお題

http://haruka.saiin.net/
title
/0/

髪に触れれば、君が自分に気が付いた（前書き）

海ちゃん視点。短か目です。

お題は【Abandon】様よりお借りしております。
愛したい10のお題

[http://haruka.saiin.net/
title/0/](http://haruka.saiin.net/title/0/)

髪に触れれば、君が自分に気が付いた

思わず、触れていたんだ、君の髪に。

「ん……あ、海ちゃん？」

「おはよう、薺子。」

「おはよう、おはようって、え、あ、あ！！」

「そうです、お休みでした、もう長いこと。」

「ご、ごめんなさい……。」

無理やり休みを合わせて、軽井沢に向かうことにしたのは、最近ゆっくり会っていなかったからだ。

薺子も僕もなぜか仕事を立て込んで、会う約束の日には会えないばかりか、

前はなんとなくお互い絶妙なタイミングでお互いの家に行っていて、それで会えたりしていたのが、全く会えないことが続いた。

医者と監察医の仕事が立て込むのって、あまりめでたいことではないので、

商売繁盛で喜ぶわけにもいかないし、多分。

「これはいけないと思うのよ。」

という、よくわからない薺子の一言で、ちょっとした旅行が決まった。

どうせまた、真理さんが隆之に何か言われたに違いない。

とはいえ、僕もゆっくり君の事を独り占めできる時間は、大歓迎だから。

場所は前から薺子が行きたいと言っていた軽井沢のホテルになった。

そこで二泊三日、だらだらしようというコンセプトだ。

どこに行くか、何をするかは何も決めずに。
以前こんな旅行をしたときは、お互いはまっていた小説に夢中で、
バカみたいに本を読みふけていたっけ。

軽井沢へ向かう新幹線の中、ずっと話していたのに、いつの間にか隣の君が眠っていた。

今朝まで働いていたことを知っているから、僕はそつと起こさないようにしようと思う。

上着をかけて、窓の外を見ると、雪がちらほらしている。
右肩に君の重さを感じながら、本の続きを読むとしようか・・・。

あと10分くらいで軽井沢に着く、という頃になっても、
薔子は一向に起きる気配がない。
そつと君の髪に触れる。

はじめて会ったとき、ショートカットだったのに、今はこんなに長い。

「なんとなく切って、なんとなく伸ばしているだけ。

切るのにも伸ばすのにも、理由はないのよ。

だから、またそのうち、ばつさり切っちゃうかもね。」

僕はショートカットの君も、長い髪の君も両方好きだけど。
いつでも、君の髪に触れられるところにいられますように。
そう願ってしまう自分がいるんだ、たまにね。

髪に触れた気配で起きてしまった君は、

新幹線の中でほったらかしだった僕にひたすら謝る。

「もう、なんでそんなににこにこしてるのよっ！」

って、君は言うけど、だって仕方ないだろう？

君のそばにいられる自分が、幸せだから。

でもそういうと君は照れて怒り出すから、内緒にしておくよ。

「ほら、もうすぐ着くよ。」

「話をそらして。いつも海ちゃんはそうなんだか・・・、あ、雪だわ！」

「そう、ずっとちらついていたんだけど。」

「結構本格的に降っているのね、明日の朝は真っ白かしら？」

「帰れなくなるかもしれないよ。」

「帰れなくなったら、君ともう一日一緒にいられるのかな。」

「それはかなり魅力的なシチュエーションだ。」

「そのときはそのときだわ。」

「・・・そうしたら。」

「？そうしたら？」

「もつと長く海ちゃんを独り占めできるもの。」

「につこりと笑いながら、そうつぶやく君。」

「・・・完敗です。」

「ああ、降りなくちゃ、しまっちゃうよ。」

「全く、心臓に悪いことを、電車を降りるぎりぎりのところで言わないでくれよ。」

「頼むから。」

髪に触れれば、君が自分に気が付いた（後書き）

想定しているお宿は、軽井沢の「星のや」さんです。

ちなみに私は真冬の平日、ピーク時の半額くらいの値段で泊りにいったことがあります。

明け方にお風呂に行ったら、瞑想風呂は薄暗くて、誰もいなくて怖かった。。

まあ、明け方に行った私がバカなんです。

個人的に大々的な贅沢ですが、またダラダラしに行きたいなー。

寝転がって考えるのは貴方のことだった（前書き）

「試してみようか」で、薺子の一言で海ちゃんがぐるぐるしている（というかさせている）間の、薺子の話。

寝転がって考えるのは貴方のことだった

「あゝ、海ちゃんに会いたいよう・・・」

ベッドに寝転がって、考えるのは海ちゃんのことばかり。昨日会って、ちゃんと充電してきたつもりだったのに。

ニューヨークについて、すぐにこのホテルに来た。

今日は時差ぼけもあるだろう、と言う配慮で、1日オフ。

最終日も買い物があるだろうと言うことで1日オフ。

なんて学会なんだろう、と思いながらゴロゴロする。

真夜中なはずなのに真昼間な街。

時差なんて大嫌いだし、飛行機も好きではない。

仕事だから仕方ないとはいえ、ホテルに着いたらベッドに転がり込むのも仕方ないと思う。

「うゝ、ねむいゝ。眠いけど、今寝ると明日死んじやうなゝ。」

朦朧とした頭で、考えるのは海ちゃんのことばかり。

機内食に出たワインがかなりおいしかったこと、CAのおねゝさんが美人だったこと、

機内で真理ちゃんが飲んでも飲んでも酔ってなくて、さすがに驚いたこと。

ニューヨークに着いたらいいお天気で、気候もよくて、散歩に行きたいと思ったこと。

でも、その散歩は海ちゃんで行きたいと思ったこと。

たくさんたくさん話したいことがあるのに、あなたはいない。

「タイミングあわなそうだから、電話もしないって言ってきたやつたしなゝ。」

昨日、大好きなカフェで海ちゃんとお茶を飲んでいるときに出張の話をしたのだ。

1週間会えなくて寂しいけど、多分タイミングがあわなくて電話もできないだろう、

ということ。

ベランダに出てみると、ほんとうにいい天気だ。

これはやっぱり外に出てみるしかないだろうか、と思っていると、電話が鳴った。

海ちゃんであるはずがないけど。

出てみれば、真理ちゃんだった。

「ちよつと、何がっかりしてるよっ！お昼食べに行くわよっ！」
「はい……」

ここで寂しがついても仕方ない、と、思いながら部屋を出る。
しかし、今頃海ちゃんは何をしているのだろう……。

真理ちゃんに連れて行かれたのは、ハンバーガーの店だった。

ちゃんと分厚いハンバーグがはさまれているハンバーガー。

付け合せのフライドポテトも美味しい。

「おいしいね、真理ちゃん」

「当たり前でしょ。一押しだから。」

真理ちゃんはニューヨークに詳しい。

高校を卒業してから1年間留学していたことがあったのだ。

「なんか元氣ないわねえ、どうしちゃったわけ？」

「うー、真理ちゃんが悪いんだよ、あんなこと言うから。」

「何？」

「1週間会わないと、遠藤君私のこと忘れてりしないかしら、とか言うから。」

「何、そんなこと気にしてるの？海君が忘れちゃうんじゃないかって？」

「そうは思わないけど、なんかすごい気になり始めたらどんどん海ちゃんに会いたい。」

「……蕎子って、じみ、にかわいい性格してたのね、忘れてたわ。」

「なによそれ」

「忘れるわけないでしょう、大丈夫、ちゃんと待っててくれるから。」

「そうかなあ、本当かなあ。」

信じているのに、時々不安になる。

いつも海ちゃんが近くにいてくれることが、いまだに奇跡、だと思う。

好きな人が自分のことを好きだと言ってそばにいてくれること、それ自体が奇跡なのに、それが長く続くんて。

「幸せすぎて怖いのかなあ……。」

うつかりつぶやくと、目の前にすっかり呆れた顔をした真理ちゃんがいる。

「もう、一生言ってなさい。」

「それいいなあ。」

「は？」

一生、幸せすぎて怖いと言っていたい。

ということは、一生海ちゃんが私のそばにいてくれる、ってことだから。

あー、早く海ちゃんに会いたいな。

会って話したいな。

「でも、こうして真理ちゃんと話してる時間も大好き。それも本当だからね。」

「はいはい、わかってます。思い出したようにフォローしなくてもいいわよ。」

大好きな人がたくさんいる私。本当に幸せだなあ、って思う。それも本当。ほんとだよ！

寝転がって考えるのは貴方のことだった（後書き）

お題は【Abandon】様よりお借りしております。
愛したい10のお題

http://haruka.saiin.net/
title
/0/
/0/

最終的に決めた事は……。 (前書き)

隆之のひとりごと。

刑事さんの生活って、とにかくお休みも不規則なイメージです。
実際どうなんでしょうね。

最終的に決めた事は……。

「ただいま、つと。」

時刻はまだ16時。

サラリーマンなら、ただいまには早い時間だ。

誰もいない室内に、つい挨拶してしまうのは昔からの習慣。

最近は時々返事が返ってくることもある。

それがうれしい。

今日はもつと早く上げれる予定だったが、予想以上に書類作成に時間がかり、

結局こんな時間になってしまった。

明日は久しぶりの非番だ。

家に戻ってきたのは2日ぶり。

「まずはコーヒーでも淹れるかな。」

隆之はそう言いながら台所に向かう。

と、台所のテーブルの上に、メモを見つけた。
よく見ると今日の日付だ。

『明日は休みです。薫』

ただそれだけのそっけないメモ。

しかし隆之にとっては、宝物のような、メモ。

思わず鼻歌を歌いながら、コーヒーを淹れ始めた。

ずっとネルドリップだったが、最近はコーヒープレスが気に入っている。

というのも、彼の恋人がコーヒープレスを愛用していたから。

彼の恋人、石浜薫は小児科医だ。

大学時代の友人たちと同じ病院に勤めている。

大変温和な性格で、子供たちからの信頼も厚い。

いまだに彼が、自分の気持ちを受け入れてくれたことが信じられない。

隆之は、今まで好きになった人はほとんどが男性だった。

しかし、薫は違う。

それなのに、あの日、自分の話を最後まで聞いてくれ、自分の中にも同じ気持ちがある、

そう言ってくれた。

驚きだった。

むしろ断られに行つたのだ。

たとえばもう会えなくなつたとしても、彼に一言気持ちを伝えたいと思つた。

それがどんなに自分のわがままだったとしても。

そのわがままを、許してくれそうな人だったから。

逆に受け入れられたことが信じられず、悩んでしまった。

自分には両親も親戚もいない。

友人たちはこういう自分を受け入れてくれている。

しかし、薫を取り巻く周りの人たちはどうだろう。

理解してくれる人が増えてきたとはいえ、今だ好奇の目を向ける人も少なくない。

彼にとって、自分がいつか致命的な存在になりはしないだろうか。

それが怖かった。

だから、お互いに気持ちが同じだとわかつたのに、しばらくしてぎくしゃくしてしまった。

おせっかいで頼もしい友人たちがいなかったら、一生薫を失つたか

もしれない。

でも、今、隆之は薫の傍にいる。
薫も隆之の傍にいてくれる。

そう、最終的に決めたことは、ひとつだけ。
どんな時でも、薫の傍にすること。

薫が本当に自分を嫌いになる日が来るまで、薫の傍にすること。
守ったり、守られたりすることは、お互い向いていない。

ただ、傍にいらればいい。

さんざん考えたのに、それだけだった。

コーヒーを飲みながら、ぼんやりメモを見つめ、考える。

ここは隆之の部屋。

いないとわかっていても、たまに薫はこの部屋に寄ってくれる。
すこしコーヒーなんかを飲んで、窓を開けて空気を入れ替えて、
して自分の部屋に戻る。

時々、こんなメモを残して。

それが、こんなにも幸せなことだとは、しばらく前の自分にはわかっていなかった。

「今日はー。そうだな、タケノコ尽くしかな。炊き込みご飯でも作るか。若竹煮も添えて。」

和食が好きなあの人に食べてもらうために。

買い物に行こうと愛用のエコバックを取り上げると、思い出したように携帯をとりだした。

夕食のメニューをメールで送り、自分も明日が非番であることを伝える。

すぐに戻ってきた短い返信に微笑みながら、買い物に出かける。

『20時には伺います。』

あの人に会える。

それだけで、とても幸せだ。

最終的に決めた事は……。 (後書き)

「銀の鷹」というなんちゃってファンタジーもはじめましたので、もしご興味があったら、よろしくお願いしますm(____)m

このお題もあと1つで終わりとなりました。

ちなみに隆之の恋人は、初めは年下の活きのいい白バイ隊員、という想定だったのです。

隆之に不用意な発言をして凹ませて、

それに激怒した蕎子が、ダチのニューハーフな美女のお店に連れて行って、

大説教大会が繰り広げられる、というほえましい(?)話を考えていました(笑)

いつの間にかおっとり優しくときに怖い薫先生が出てきちゃったのですが。

薫先生は、ファンタジーの銀髪の吟遊詩人なイメージ(笑)

でも、この話は割とぼんやりした人たち(笑)が多いから、白バイ君でも良かったかなあ、と思いつつ。

お題は【Abandon】様よりお借りしております。

愛したい10のお題 <http://haruka.saiin.net/title/0/>

貴方に言わなければいけないことがある（前書き）

隆之の話です。珍しく、薔子に叱られています。

貴方に言わなければいけないことがある

「あー、今日も会えなかったなあ。」

仕事を終えて帰る途中、ついそんな言葉をつぶやいていた。

時刻は午後11時。帰宅時間としては早いのか遅いのか。

某署捜査一課一係の刑事さんである俺、斉藤隆之にとって定時などいつのことだかわからないなー、という感じである。

友人たちに9時5時の仕事のヤツが多くないのは、幸いなことだろう。

こんな時間からでも遊べるというのはうれしいことだ。

しかも今日は恐ろしいことに、明日は休みで友人たちも明日は休み、という偶然だ。

もう少し早く発覚していたら、多分無理やりにもどこかに泊りがけで

遊びに行っただろう。

しかしわかったのが1時間前、しかもそのうちの1人が夕方から仕事、

ということ、仕方なくおとなしく飲むことになった。

「これから何時間飲むんだろうなー、いったい。」

待ち合わせ場所でもある行きつけのバーは、大酒飲み4人＋1人のこの団体を

珍しく好ましく思ってくれているらしく、

こちらとしても大変居心地のいいバーなので大助かりだ。

「あ、来た来た、隆之ー！」

「おう！」

声をかけてきたのは佐伯薔子。

見た目は派手な美人だが、結構天然ボケであり、中身とのギャップが激しい。

仕事の時はさすがに見た目を裏切らないはつきりぶりなのだが。

これから会う友人たちは全員大学時代の同期だが、こいつと佐久間真理絵は監察医、

榊原海と遠藤光太郎は医者をしている。

そう、俺達が通っていたのは医学部で、俺も医師免許は持っている。しかし子供のころからの「刑事になりたい」という思いを捨てきれず、急遽進路変更したわけだ。

薔子の勤める監察医務院は俺の所轄にあり、仕事でもよく会う。

海と遠藤が勤める病院も近所で、やはり仕事柄よく行くところだ。

「他のやつらは？」

「ええとね、海ちゃんと遠藤君はもうすぐ着くって、真理ちゃんはおと1時間くらい

かかりそうって言ってた。」

「なるほどね。あ、どうも。じゃあ俺は合えばロックで、もしくはお勧めの飲み方で。」

いらっしやい、と出迎えてくれたマスターに注文する。

最近はウィスキーに凝っているのをマスターは知っており、こういえば飲んだことがない

銘柄のものをしてくれるのだ。

「多分今日でうちにあるのは全部お飲みになってしまっただろうね。そうしたら何を飲まれるか考えておいてくださいね。」

はじめたのはいつだったけな？結構な種類があると思っただけだ。

「意外と早かったなー。そうですか。どれもおいしかったからもう1周しようかな。」

「大酒飲みだー。。。」

「何を言う、俺はたいしたことないぞ。

そもそも誰かさんと違って酔っ払ってどうにかなったことないしな。」

「悪かったわねー。今日こそ寝ないわよ！」

そんな二人のやり取りを受け、にこにこマスターが言う。

「隆之さんも意地悪ですね。薺子さんだって普通の人から見れば相当お強い方ですよ。」

ただ、他の皆さんがものすごくお強いだけで。」

そう、薺子は結構強い。他の飲み会で酔っ払ったことなどないらしい。

が、俺達と飲む時は必ず酔って寝る。

「特に真理絵と飲んでるときが一番寝てるんじゃないのか？」

「だって真理ちゃんはさー、あれ絶対意識的につぶしてるんだよ、私のこと。」

ぶつぶつ言っている薺子を横目で見ながら、またあの人のことを思い出す。

今日は夜勤だろうか、それとも家でちゃんと眠れているだろうか。

ふと目を伏せた横顔が思い浮かぶ。

静かで穏やかな暖かい風が心を吹き抜けるようだ。

そう、こっぴどく話だが、俺は今、薺子が言うところの「絶賛片思い中」だ。

相手は海と遠藤が勤める病院の医師で、2つ年上の、男性だ。

俺が好きになる人が同性ばかりだ、ということ意識したのはいつか覚えていない。

初恋は幼稚園の時、隣のクラスの美咲ちゃんという女の子だったわけだが。

別に隠すようなことでもないが、言いふらすようなことでもない。友人達は知っているが、他は適当にごまかしている。

かくいう薺子も大学時代、俺に告白してくれたことがある。

薺子のことは好きだが、恋愛対象としては見る事ができなかった。

その後薺子と海はある年のクリスマスに同時にお互いをデートに誘

い、

デート中に同時に告白すると言うシンクロっぷりで、現在に至る。
ちなみに遠藤と真理絵も大学時代からの付き合いだ。

・・・もしかして俺はダブルデートの邪魔をしているのか？

ふと気づくとぼんやり考えごとにふけっていたことに気づく。

焦って隣を見れば、蕎子がつこり笑いかけてくる。

「ごめん。」

「別にー。あ、そういえば聞いた？服部君今度結婚するんだってよ。」

何もなかったように蕎子は話しかけてくる。昔からそうだ。

俺はたまにぼんやりと考え事をしてしまう癖がある。

過去それでどれだけ友人や恋人を無くしたのか。

でも蕎子は、いや、蕎子だけでなくこれからやってくる友人達はそんな俺を

そつとほっておいてくれる。

ある時蕎子に聞いたら、

「だって、考え事することくらい誰だってあるでしょ？」

隆之はそれがわかりやすいだけだし。」

考え事してるときはそれに集中したいものね、と笑った。

告白を断る時、蕎子と約束したこと、それは「一生友人でいる」「こ
とだった。

蕎子のためではなく、俺のために非常にうれしい約束だった、と今
では思っている。

「こんばんはー。あ、隆之、今日は早かったんだね。」

「よう、海。遠藤の車で来たのか？飲む気だな、お前。」

「いや、今日は榊原の車で来たんだ。今日はもともと真理絵と飲む
予定だったんでな。」

海と遠藤が到着する。

こいつらは優秀な外科医と内科医だ。

大学病院で研究を続けていくと思っていたが、大学の系列である今の病院に移ってきた。

派閥とかが苦手だし、と二人は言うが、大学を離れてもなお、この二人に対する

周囲の期待は変わらないようだ。

学会での発表などはもちろんだが、

『すごいね、きれいなお嬢さんとかに引き合わされているところを見ちゃったの。』

と、蕎子が自棄酒に誘う電話をかけてくるくらい、海と遠藤は教授たちの娘婿候補

としても大人気らしい。

…そういえば、真理絵に自棄酒に誘われたことはないな。

遠藤とちゃんと話しあえているか、もしくは蕎子を誘ってつぶして憂さ晴らししてるんだろうか？

遠藤と蕎子が真理絵の噂をしながら注文をしているのを見ると、声をひそめて海が俺にささやく。

「あ、そういえば。石浜先生、今日出張から帰ってきたはずだよ。明日もう一日休んで、

あさってから出てくるみたいだった。」

海の言葉に心臓が跳ね上がる。

「そうか、出張だったのか。ありがとう、海。」

海はもう少し何か言いたそうにしていたが、結局それ以上何も言わず席に着く。

遠藤と最近の話をしながら、いつの間にかまた俺は考え込んでいた。

石浜薫に出会ったのは、仕事で海や遠藤の勤める病院を訪れた時のことだ。

事件の目撃者である小学5年生の女の子に話を聞いたためだ。

彼女はその事件で、足に怪我を負った。

運ばれたその病院で、既存の小児喘息が悪化し、入院となった。

事件のショック、足の怪我、様々な要因が考えられた。

しかし、俺は事件の解決を焦って、彼女の見舞いもそこそこに話を聞こうとした。

事件を解決することこそ、彼女の安心につながると思ったからだ。

そんな病室から、俺を叩き出して屋上でこんこんと説教をしたのが石浜薫だった。

彼は優秀な小児科医であり、彼女の主治医であった。

しつこく話しかけようとする俺を押さえ、彼は彼女にはにっこりと笑顔を見せつつ、

強引に俺を病室から出した。

いや、叩き出した、と言っても間違いではないだろう。

「また後で来るからね。」と言った口で、彼女には聞こえないよう、俺だけに言った。

「表へ出てください。」

「は？」

「この病室から出て行ってください。」

「な、何を・・・」

「これ以上話さないで、とっとと外に出てください。」

そうして、強引に、細い腕からは想像もつかないような力で、外に出された。

屋上に無理やり連れて行かれ、開口一番、

「これから私の言うことを聞いてもらえないのであれば、もうここには来ないでください。」

「どういうことですか。俺は事件の捜査を・・・」

「事件の捜査なんて、私にはどうでもいいんです。」

彼女の治療の邪魔です。」

「邪魔だって？」

そこからいくら何を言っても、俺の入出許可は下りなかった。今になって冷静に考えると、どう考えても俺のやり方が悪い。

医学部に行つて、病院で実習したこともあるのに、恥ずかしいばかりだ。

その時は、そんな簡単な事にも気づかなかったのだ。

彼女に会えないまま、俺は捜査を続け、結局犯人を逮捕することができた。

その頃には既に自分の間違いに気づいていた俺は、逮捕の報告をしてもらおうと、

薫さんに面会を求めた。

診療が終わったあと、診察室に通された俺は、最初に謝ることにした。

「その節は申し訳ありませんでした。」

薫さんは無言だった。

あまりに単純すぎただろうか、謝っても遅いといわれるのだろうか、そんな不安から顔をあげると、その人はびっくりした顔でこちらを見つめていた。

「なんでそんな顔しているんですか？」

何か驚かせるようなことをしただろうか。

「いえ、今まで刑事さんをたたき出したことは何度もありましたけれど、

謝られたのは初めてなもので、つい。」

彼はそう素直に言うつと、そつと微笑んだ。

何度もたたき出したことあるのかよ、おい、つて、ツッコミでも入るべきだが、

・・・その顔にノックアウトされたのだ、今にして思えば。

俺は特別な信仰をもたないが、マリア様や菩薩のような微笑み、というのは、

こういうのだろう、と思わずにいられない顔だった。

今度は俺が無言になる番だった。

「気になっていたのです、あの後も。」

あなたが一生懸命だったことはもちろんわかっていましたし、
榊原先生や遠藤先生も心配なさっている話してくれましたし。
しかし、彼女にとっては、もう少し心を落ち着ける時間が必要だ
と思った。

だから、どうしても許可を出すことはできませんでした。」

そして、捜査のお邪魔をしてすみません、と頭を下げた。

ますます驚いて、俺は声が出なくなった。

とはいえ、本来の目的を果たさなくては、氣力を総動員して、俺は
声を出した。

「犯人は捕まえました。」

そう言おうと思ったのだ。

それなのに次に言った言葉は

「あの、今晚、飲みに行きませんか？」

・・・何言ってるんだ、俺。

「は？」

そりゃあ驚くだろう、そんなことを突然言われたら。

彼は顔をあげて、またびくりした顔で俺を見つめる。

「いや、あの、えっと、そうじゃなくて。」

えーと、そう、犯人は無事に捕まえました。

それを彼女に伝えてほしくて。

もう怖い思いはしなくていいから、と。」

動揺は隠しきれないまま、それでも一気に言えた俺は偉いと思う。

「そうですか、それはよかった。彼女に伝えます。」

ほっと息をつく。これで今日の目的は終了だ。

謝ったし、伝えたし。

これ以上ここにいると、何を言い出すか自信がない。

「では、俺はこれで。」

さっさと逃げ出すに限る。

一礼し、くるつと踵を返した俺の背中に声がかかる。

「あのっ」

え？なんだ？

「はい？」

やっぱりあんなこと言ったから、怒られるんだろうか。。。

「ええと、9時くらいからなら行けますけど。」

は？

「あの、飲みに、ですが。そのくらいには今日は終わります。

もし、よろしければ、ですが。」

ゆつくりと笑顔を作っていくその人の顔を、俺はじっと見つめていた。

その日以降、たまに薫さんと飲みに行くようになった。

彼も酒が強く、お互いかなり飲んでも決して酔いすぎたりはしない。

お互いに守秘義務のある仕事だから、仕事の話はしない。

適当に世間話をし、時には海や遠藤の話をする。

ここに連れてきたら随分気に入ったようで、一人でも来ているらしい。

薺子がたまたま一緒になった、と言っていた。

だからと言って、俺は何も伝えていない。

今は、まだ。

日に日にあの人への思いは増すばかりだが、さて、どうしていいものか。

今までも、好きな相手には好きだと言ってきた。

自分が好きになるのが同性だということで、いろいろ言われることもなかったわけじゃない。

大学に入ってから、この友人たちにずいぶんと救われたこともある。

しかし、彼は医者だ。

社会的に地位のある人間だ。

将来のある人間だ。

別に自分がどう思われようと自分のせいだ、構わない。

しかし、あの人が誰かに何かを言われたりすることがあったら、俺はどうしていいかわからない。

どう償っていいのかわからない。

まだまだ日本はそういう意味では狭い世界の部分もあるのだから。だから俺は何も言えない。

そつとあの人が今日も無事で、穏やかに過ごせばいい、と、願うばかりだ。

また、ぼんやり考え事をしてしまった。

ふと横を見ると、じつとこちらを見ていた蕎子と目が合う。

「隆之はさあ、どうしたいの、いったい？」

「なんだ、いきなり。」

少し酔って目じりをほんのり赤くしたまま、眉根を寄せて蕎子が小さな声で言う。

「あの人のこと、どうしたいの？このままなの？」

「どういう意味だよ。」

「あの人は、少なくともそういうことで人を区別したりしないよ。

好きでも好きじゃなくても、ちゃんと答えてくれるよ。

そういう人だって、隆之だってわかってるんでしょ？」

「蕎子……。」

驚いて蕎子を見つめる。

隣にいる彼女は170センチの身長だし、7センチヒールくらいはいているだろうから、

どう考えたって相当でかいはずだが、今はどう見ても小さい子供のように見える。

お前は何を言いたいんだ、いったい。

「何か言わなくちゃいけないこと、あるんじゃないの？あの人に。いいの？このまま手を離したら、もしかしたら一生会えないことだってあるんだよ？」

「なんでそんなこと言っただ？」

「隆之が幸せじゃないと、つまないんだもん、だって。」
ちよつと力チンとくる。

「俺が幸せじゃないって言うのか？」

しかし、たたみかけるように言い返される。しかも涙目だ。

「幸せじゃなさそうだよ、最近。すぐ考え込んでため息ついて。考え事は構わないけど、ため息つくような考え事ばかり。」

それっておんなじことぐるぐる考えているだけでしょう？

そのままずっと考え込んでいるつもりなら仕方ないけど、

いい加減考えるだけなのは終わってもいいんじゃないかと思うんだけど。」

・・・息をのんだ。

ぼんやり考え事が多いのは、昔からだ。

しかし、考え事の後に、こんなにため息ばかりついているのはここ最近だ。

あの人のことをどうしたものか、と考えていると、ついため息が出る。

そんなところばかりを、蕎子には見せていたらしい。

「おかしいよ、隆之。」

幸せになっただけいいんだよ、人は誰でも。

隆之も例外じゃないよ。

思いが通じなかったら、その人の幸せだけ祈ればいいんだ。

悲しくても辛くても、その人が幸せでいてくれるなら、うれしいんだよ。

そういうものだよ。

言い過ぎなら謝るよ。

でも、いつまでもため息ついていてほしくないよ、私。」

蕎子に言われ、ふと周りを見ると、海も遠藤もこちらをじっと見ている。

海が蕎子の頭を子供にするように優しくなでながら、にっこり笑って言う。

「蕎子、そこまでだよ。わかってるんだろっ？」

蕎子はそつと目を伏せ、つぶやく。

「わかってるもん、これ以上は言わない。ごめんなさい、隆之。」

謝るな、蕎子。お前が謝ることは一つもないんだから。

「ありがとう、蕎子。」

「え？」

「マスター。会計お願いできる？俺の分だけ。」

遠藤が言う。

「ああ、それは大丈夫だ。

・・・行くのか？」

「ちよつとな、野暮用だ。真理絵によろしく。」

「久しぶりに会いたがってたから、多分ぶつぶつ言うと思う。」

そのうち面と向かって話してやってくれ。」

「了解！じゃ、俺、行くわ。」

俺はそういうと、カウンターから立ち上がる。

「隆之。」

海が呼びとめる。

振り向くと海と蕎子、遠藤がこちらを見ている。

マスターまでにこにこと笑っている。

「いつてらっしゃい、またね。」

蕎子がにっこり笑って言う。

さっきまで泣いてたのにな。

・・・いや、俺が泣かしていたのにな。

ごめん、ありがとう。

軽く肩手をあげると、俺は外に出た。

なぜか軽く震える手で、携帯に電話をしてみる。

『はい、石浜です。』

「俺です、斉藤ですが。夜分遅くにすみません。」

『ああ、こんばんは。どうしたんですか、いったい？』

「今、どちらですか？」

『自宅です。実は出張で今日戻ってきたんですよ。』

「厚かましいお願いで恐縮ですが、これからお目にかかれませんか？」

『は？』

ここで、もう一度。勇気を奮い起さなければいけない。

蕎子にもらった、みんなにもらった勇気を。

「貴方に言わなければいけないことがあるものですから。」

どんな結末になるにせよ、と、心の中でつぶやいた。

貴方に言わなければいけないことがある（後書き）

薫先生と隆之が初めて会った、事件関係の態度についても、それが正しいのか、許されるのか、とかわかってませんが。

まあ、薫先生が患者第一だと思っていただければ。

そしてやっぱり刑事さんやらお医者さんの仕事全貌や勤務時間帯など、

自分の中でファンタジーだなー。

勉強不足ですみません。

これで「愛したい10のお題」終了です！

が、まだまだ続けていきたいと思います。

：これ、どうすれば章だてにできるのか分からないのですが、引き続きご愛顧よろしくお願いいたしますm（――）m

お題は【Abandon】様よりお借りしております。

愛したい10のお題

<http://haruka.saiin.net/title/0/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5068q/>

愛したい10のお題 改め 6人の物語

2011年9月27日23時03分発行